

Monto Kaj Neô

Monata Organo de Monta kaj Neôa Clubo.

山 と 雪

第 二 卷  
第 壹 號



札幌 山と雪の會 發行

次 目 號 二 第



革とスキ

日本山小屋誌(1) 藏王小舎

右 股 の 谷

ワイスホーンの點描

アールベルグ派の廻轉理論の疑問に就て

デイスタンスレースの練習法に就て (二)

全日本選手權大會に臨みて (四)

◆ 雜 錄

寫 眞

藏 王 小 舎  
藏王小舎のトータムボール

圖 版

毛の横断面 毛の外観 海豹粗毛横断面圖

海豹粗毛 革の張力と部位

藏王小屋平面圖

右股のヴァレ

澤 田 智 (一)

刈 田 不 忘 (二)

坂 本 直 行 (三)

荒 井 誠 生 (四)

A 橋 昂 (五)

B 橋 昂 (六)

C 橋 昂 (七)

刈 田 不 忘  
刈 田 不 忘

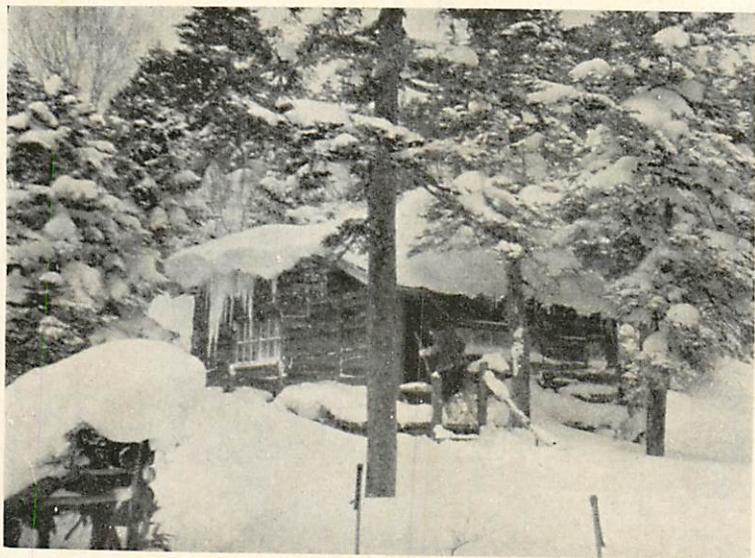
澤 山 智

同 山 智

刈 田 不 忘

坂 本 直 行

昭和七年一月發行



藏 王 小 舍

刘 田 不 忘

# 革　じ　ス　キ　ー

澤　山　智

魚類、爬虫類を初めとして、凡そ吾人が鞣製利用するところの動物皮は、極めて廣汎に互てをるが、就中、或は防寒毛皮として、乃至は一般革類として、最も有用なる皮革原料皮は、哺乳動物皮である。

偶蹄類、奇蹄類等有蹄類中には牛、馬、羊、山羊等、一般皮革原料として、有用なる皮を供給する動物が多いが、豺、狼、獾、熊、狐、黒貂、黄貂、臘虎、臘鼬獸、海豹、栗鼠、兎等の毛皮動物は、肉食獸と齧齒類中に主として包含されておる。

屬するところの種族に従て、夫々特性を有つ各動物皮の鞣製利用は、自ら用途に適否がある。重厚、堅硬であつて而も強靱なる牝牛皮がソール、リーマン乃至は馬具用革に、馬皮が砥革に、山羊皮が高級用革に、綿羊皮が手袋、製本用背革に、豚皮が乗鞍用革に、鹿皮がブーツレダーに、猿皮が甲冑織革に、猫皮が三味線に、仔馬皮が能樂用小鼓に、アザラシ毛皮がスキー用シニタイグ・ヘルツに、夫々賞用せられてをるは、何れも各動物皮の有する特性を巧に捉へて、夫々の用途に適應せしめたるに他ならないものである。

斯様に各動物皮は種類に従て用途を異にしてゐるが、夫々の有つ特性をして充分發揮せしめて用途に好適せしめるためには、自ら鞣製方法をも擇ぶ必要がある。タンニン鞣製、クロム鞣製其他油脂、明礬、燻煙、アルデハイド鞣製等數多の鞣製方法が行はれてゐるのは、何れも用ゐるところの鞣製主劑に従て、夫々生するところの革の物理的、乃至は化學的性

質を全然異にするものであるからである。例へばタンニン鞣革は重厚、堅硬であることを要求して、延伸性を忌むソールリーメン、其他サドル用革の製造に應用せられ、之に反して、軟柔にして強靱、輕快であつて耐水性であることを必要條件とするアツバーレザ（靴用革）にはクロム鞣製法を、特に柔軟であつて、耐水性でなければならぬブツツレーダーには油脂又はアルデハイド鞣製法が古くから行はれておるのは、何れも夫々の原料皮が元來具有する特性に應じて、愈々その特性をして發揮せしめるために、適應するところの鞣製方法が夫々擇ばれてゐるものである。

### スキー用シュタイゲベルツ

ゼーフンドベルツがスキー用登攀毛皮として恰適するところから、近年頗る需要を増加してゐるが、此傾向は將來も益著しくなるものと考へられる。

抑も海豹毛皮がシュタイゲベルツとして最適する理由は、その生毛の具備する形態的特性にあるは云ふ迄もない。次に海豹毛皮の特性に就いて詳述してみよう。

敢えて海豹毛皮に限らないが、凡そ水棲動物皮は、之を陸棲動物皮に對比すると、一般に耐久性に富む生毛を具有するは、ものである。クラージェンベルツとして、數多の毛皮中特に臘虎、水獺、臘肭獸、海狸等の海獸毛皮が歡迎されてゐるの單に此等の動物皮が軟柔、繊細であつて美麗なるフラウムハールを有つところのみ理由があるのではない。此等海獸毛皮が一般陸棲動物毛皮に優る毛皮としての長所は主として、その耐久性に富む點にあるものである。

爪と共に上皮細胞の化生せる動物毛は、その化學的組成に於て、炭水化物からなる植物性纖維とは違つて、ケラチン、メラニン、シスチン等の蛋白質からなるが、同様に動物性纖維に屬する天然絹糸とは、又硫黄化合物である點に於て異なつてゐる。

動物毛が酸又はアルカリ等に對する化學的性質、及び張力、彈力、吸水、耐熱性、熱の傳導率等の物理的性質に於て

植物性纖維と異なるのは、元來その化學的組成が全く相違するためであるが、同時に動物毛は形態學的構造に於ても、植物性纖維とは全然趣を異にするためでもある。

一般動物毛は之を形態上から、剛毛、粗毛、綿毛の三種に區別する。海豹、膾膾獸その他野獸が一般に有つ口鬚は剛毛であつて、緬羊の如きは人爲的改良の結果、粗毛を失つて綿毛のみとなつたもので、牛馬は反對に綿毛を有たないものである。

綿毛と粗毛とに區別なく、凡そ動物毛は、髓質部、皮質層、上皮層の三部分からなるものである。髓質部は細胞内容の乾枯に依つて、空洞をなしてゐるが、繊細なる綿毛中には全く髓質部を有たないものがある。上皮層は外觀魚鱗の如く、數多の鱗片の連續からなつてゐるが、綿毛に於ては鱗片の周縁遊離して、突起をなして魚鱗に似てゐるけれども、粗毛にあつては、概して長大で表面平滑で鱗片は、僅に存する溝の如き境界線に依て、鱗片を認むるに過ぎない。

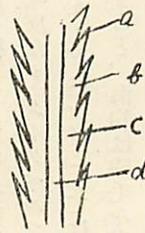
海豹毛皮がシュタイグベルツとして利用されるのは、密生する粗毛の働にあるが、粗毛が綿毛と異なり表面平滑である。點はシュタイグベルツとしては重要な特性である。

一見すると、海豹は綿毛を有たない様であるが、防寒のためには、綿毛をも具へてゐる。兎毛皮の有つ粗毛と綿毛との比例は一對二十であつて、綿毛に富むが、海豹皮は粗毛の割合が遙に大である點も、シュタイグベルツとして恰適する他の理由の一である。第三の理由としては、一般陸棲動物毛にはみることの出来ない特性が、海豹の粗毛の構造上に認められる。一般に動物毛の横断面は、圓形であるのを普通とするが、時に楕圓形を呈するものがある。海豹その他一般に、水棲動物毛の中で粗毛の働は、防水に依る体温の保持にあるもので、それがためには海豹の粗毛は著しく扁平であつて、水に濕潤し吸水するときは、粗毛はその基根部に於て釣針の如く彎曲する性能がある。これは吸水に依て起る毛細胞の膨脹率が、外側に於て大で、内側に於て小であるためである。

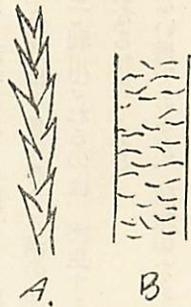
前述の如く、吸水に依て扁平なる粗毛が内側に向て、強く彎曲するがために、海豹其他膾膾獸等が一度潜水すれば、体

表面を蔽ふ短大なる粗毛は、起毛筋の作用ではなく、無意識的に、一様に体表面に於て彎曲密着して、綿毛間に存在したる空気を完全に密閉逸出を防ぐために、能く浸水に依る体温の散逸を免れると同時に、潜水中は毛の水に對する抵抗を減じて游泳に便ならしめ且つ容易に水面に浮揚する作用をもなすものである。

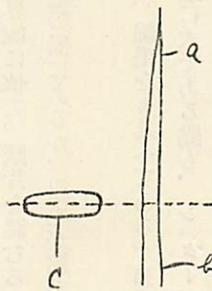
第一圖  
毛の縦断面  
片層部  
鱗片層部  
上皮質部  
皮質部  
髓質部



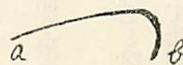
第二圖  
毛の外観  
綿毛  
粗毛



第三圖  
海豹粗毛の横断面  
先端根面  
毛根面  
横断面



第四圖  
海豹粗毛に依る吸水彎曲  
先端根  
毛根



多くの毛皮中特に海豹毛皮がスキー用シュタイグベルツに恰適する所以は、短大剛硬なる粗毛の密生せる點にも勿論あるが、濕潤して他の陸棲動物毛の如く、毛並の亂れることがなく、寧ろ乾燥時に於けるよりも、内側に向ての弾撥性を加へて來る點が、他の陸棲動物毛皮を以ては、代用することの出来ない特異性であるのである。凍結しない範圍に於て、海豹毛の此の特性を利用するために、使用に先だつて僅に、毛を濕すことは、シュタイグベルツの効果を以て、昇降共に一層有効ならしめる便があるだらう。

### シュタイグベルツの鞣製法

従來一般毛皮の鞣製には、食鹽と明礬の混合溶液を以てする。所謂トウイングなる鞣製法が、操作簡單容易であつて、

而も純白軟柔なる毛皮を得らるので廣く行はれてゐる。

皮毛として、特殊なる使命を持つシユタイグベルツの鞣製に、他の防寒毛皮と同一なる明礬鞣製を施すのは、不合理である。云はなければならぬ。敢えて耐水性を必要としない一般毛皮の鞣製には、操作の容易簡單であるトウイングも、必ずしも不可ではないが、シユタイグベルツの如く、常に使用に當て、融雪に依る吸水濕潤を免れることの出来ない毛皮の鞣製には、是非とも耐水性を帯びしめて、吸水乾燥に依て硬化變性を來さざる鞣製法を擇ぶ必要がある。此目的に對して有効である鞣製法は、明礬とタンニン乃至は明礬とクロムの複合鞣製法であるが、就中クロム鞣製法は軟柔なる毛皮を生ずる點から見て、海豹毛皮の鞣製には恰適するものである。

薄青色を帯びて軟柔であるクロム鞣製毛皮は、白色を呈する明礬鞣製毛皮に對比して、遙に耐水耐熱性に富む特異性があるが、尙貯藏中は明礬鞣製革の如く、吸濕性を帯びてをらないために、カビの害から免れることが出来る。特に赤色斑點を貽すカビは、毛皮の皮質をして著しく腐蝕脆弱化せしめるものである。かゝる理由に依てスキー用海豹毛皮の鞣製には薄青色を帯びるクロム鞣製法を撰擇する必要があるが、未だかゝる海豹毛皮を一般に需める事の至難である今日では、自然自製するの他はないが、次の所理法に依て比較的簡單容易に耐水性の毛皮を得ることが出来る。

市販の明礬鞣製海豹毛皮を、所用の幅よりも一割乃至二割廣く裁斷して、次のクロム明礬溶液中に三日乃至四日間浸漬して、切斷面に白色部の残らざるに至て取り出す。一、二日間可及的乾燥せざる様保存して、次に軽く水洗し、重炭酸曹達の〇・一%液に三十分間浸漬洗滌して乾燥する。乾燥は充分伸張して、板に釘張として整形する。

#### クロム明礬液の調合法

クロム	五〇瓦	水	一立
明礬	二〇瓦	食鹽	一四〇瓦
次亜硫酸曹達			

注意 加熱溶解せしむれば亞硫酸瓦斯を發生し、硫黃の黄色沈澱を生ずる。亞硫酸瓦斯の發生せざるに至りて、冷却水

を補ふて使用する。

### 海豹毛皮の保存と鑑定

一般に毛皮類の保存法は、乾燥に依るカビの豫防と、防虫劑に依る食毛蛾の驅除である。充分に天日に曝して乾燥し、ナフタリンを添へて罈力罐に密閉貯藏すれば安全であるが、乾燥前に亞麻仁油、桐油の如き乾燥性油を毛に塗布すれば、毛に弾性を與へて保存と耐久性を増さしめるに効果がある。

從來の白色なる明礬鞣製海豹毛皮は濕潤したるまゝ乾燥すれば伸縮と同時に硬化するであらう。此缺點を防ぐためには硫酸曹達の飽和溶液を裏面に塗布し、徐々に風乾すれば、或程度まで有効である。併し硫酸曹達は吸濕性があるために、容易に吸水して革を軟化せしめる缺點がある。

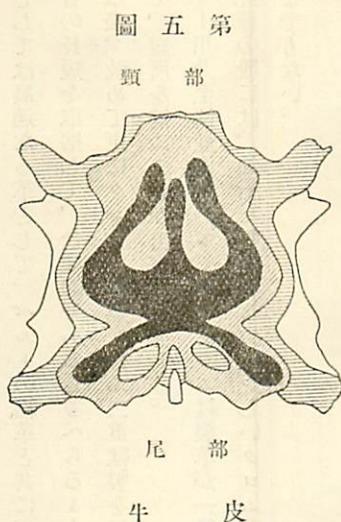
一般に毛皮の鑑定は、毛質と皮質とに就いて行はなければならない。海豹毛皮の毛質に就いての鑑定は比較的簡單容易である。長大なる粗毛の他に短小にして幾分卷縮せる綿毛のあるものは、冬毛であつて毛質は良好である。海豹毛皮の毛色は、元來半透明なる無色毛に、黒色毛の斑點を交へるものであつて、黒色斑點の多きは背部で、少きは腹部である。勿論背部の毛が剛硬に彈撥性も強いからシユタイグヘルツには良好である。往々みうける黄色に着色したる海豹毛皮は、自然色ではない。これは剥皮後、脂肪腺の破壊に依て、貯藏脂肪の浸潤酸化に依る着色である。同様なる着色は皮質部に於ても往々散見するところであるが、かゝるものは革は軟柔性に乏しく、硬く脆弱なるものであるから勿論良質の毛皮とは云へない。同時に惡臭を放つて不快なるものでカビの被害も多い欠點がある。

### ヒンドウングとシュラーフザツク

今日一般に用ゐらるゝヒンドウング用革は、青色のクロム鞣製毛皮と、褐色を呈するタンニン鞣製革とである。前者は

今日一般に用ゐらるゝビンドウング用革は、青色のクロム鞣製牛皮と、褐色を呈するタンニン鞣製革とである。前者は張力に富んで軟柔であるため摩擦に對してもダウエルハーフトであるが、延伸性に富む欠點がある。後者は此の欠點は尠いが革が硬く張力にも劣り、特に摩擦に對して弱く、鐵器に永く接觸すれば、タンニン酸鐵の黒色化合物を生じて、革の張力と耐久性を著しく損する欠點がある。斯様に兩者ともに一得一失はあるが概してクロム鞣製革が耐久性に勝る點から恰適するものと考へられる。

前肢部



第五圖 革の張力と部位

	{張力 170kg 延伸率 60%
	{張力 170-260kg 延伸率 60-26%
	{張力 260-250kg 延伸率 26-20%
	{張力 350kg 以上 延伸率 20% 以下

一般に革の張力は鞣製技術の巧拙は勿論、革の部位に從て著しい相違のあるものである。

第五圖に於て知らるゝが如く、背部と臀部とに於て張力最も強きものであるが、同時に延伸率の大なる革は張力に於ては逆に劣るものであるから、ビンドウングの鑑定は革の纖維のよく充實した、伸びないものを選ばなければならぬ。其は他革の張力は含有する油脂の質と量と密接なる關係にあるものである。タンニン革に比してクロム革が油脂を吸収する力

に乏しい點もビンドウングとしてはクロム革の一の欠點であるが、革の保存上クロム革には特に浸透性の強い油脂を屢々塗布する事を忘れてはならない。

外國製ビンドウング中には多量の不乾燥性油脂を塗布した油脂鞣革に、乾燥生皮を縫合せしめたと思はるゝものがある。防水と耐張力と延伸性を防ぐためには最も合理的な考案であらう。

日本には古くから張力絶大であつて、純白軟柔なる特産品である姫路革がある。此に加工するならばスキー用ビンドウングとしては最適なる革として、ベルトの綴革と共に、世界に紹介するに足るものが出来るであらう。

兩者の長短を取捨して、合理的であると考へらるゝものは、タンニンとクロムとの複合鞣製革である。クロム鞣製を施したる後、改めて更にタンニン鞣製を行ふ二重鞣製を行ふものであつて、かくすることに依て、能く兩者の長所を併有せしめて、短所を補ふことが出来るのである。

スキー用乃至は登山靴の多くは、クロム鞣製革が一般に使用されてゐる様である。格別多量の油脂を含ませる必要のある此種の靴には、油脂を吸収する力に乏しいクロム革よりも、前述のタンニン、クロムの複合鞣製革が恰適することは云ふまでもない。

### シユラーフザツク

寒氣に對して格別に抵抗力の乏しい吾人々類が、防寒的器官を生來具へておらないことは、自然淘汰の法則を無視した大なる矛盾であると云はなければならぬ。此の缺陷を補はんとして、太初原人等が思ひ付いた、野獸毛皮の利用こそは實に人類をして、猛獸毒蛇の脅威ある、トロピカルライフから、溫帶、遠く地軸の兩極にまで進出して、此處に安住の地を得させしめた動機であるとも云へるだらう。されば狩獵と、馴鹿の游牧とを生業とするポールフォルクスも天惠毛皮の加工と利用の途を識らないものはない。今日到る處に鞣製用石器類が出土するのも原始人が已に毛皮の加工を行つた證左である。

自然の所産である野獸毛皮が、防寒衣服として、人工の織物類に遙に勝るとも、敢えて怪しむには足りないが、纖維を横に紡いで織る吾人の織物は、重厚氣密であるが、生毛は互に游離併立する天産毛皮は輕快であつて、同時に包藏するところの空氣は熱の不良導體である。一般に織物類が摩擦に弱く、重厚であつて防寒効率に劣り、毛皮が輕快耐久力に富んで、防寒効率百%であるは、之がために他ならないが、同時に吾人は毛皮の一部分として、重要な防寒的働をなす革質部のあることを看過してはならない。

アルピニストの野營に、航空防寒に、毛皮が最適であるのは此がために他ならないが、數多の毛皮中でも、ギリヤークエスキモーその他のノルドフォルクスが好んで使用する馴鹿毛皮は、その毛と革質部の構造上から見て、シユラーフベルツとして最適のものである。

一般に鹿族の生毛は粗毛のみで、防寒的役目をなす綿毛を有さないものである。馴鹿毛皮に限て、極めて僅少な綿毛に相當する細毛を有するが、勿論防寒的効果は殆ど認める事が出来ない程僅少に過ぎない。防寒の役目をなす綿毛に恵まれない馴鹿は、沍寒凜烈なる極北の嚴寒に抵抗す可く、特別なる構造を具へたる粗毛に依て缺陷を補てゐる。

宮島に飼はれる鹿は、海を渡つて近隣の島々に進出を企てるのを見たことがある。古くから鹿群の渡海轉棲した事實は古書にも散見する處である。格別重大なる角を戴く鹿が、大海を渡るためには、四肢の運動のみでは不可能であるとして鹿の渡海は島人間の謎である。

古來救命具として航海に使用する浮袋の韻充物には、馴鹿又は鹿の毛が重用されてをる。鹿毛は髓質部廣大であつて、空氣を貯へる事が多いために、浮揚力の大きなものである點に想到すれば、鹿群渡海の謎も解けるだらう。

防寒の役目をなす綿毛に恵まれない馴鹿が、克く嚴寒に堪えるのも、髓質部が大である事と、質の粗糙であつて、熱の傳導性に乏しい、長大密生する粗毛を有するがために他ならない。アルピニストの利用するのも此特性があるためである。馴鹿の冬毛は、かゝる特殊なる性質と構造とを具へて、防寒毛皮としては優秀なるものであるが、毛質の粗糙であるが

ために、脆弱折斷し易き缺點を逸れることは出来ない。之がために特に馴鹿の夏毛をシユラーフザックに擇ぶ者があるが愚である。シベリヤ、カムチャツカに主産して本邦では僅に幌内河流域一帯のツンドラ地帯に特産するに過ぎない馴鹿毛皮は、可成高價なるものである。寧ろ安價なる綿羊毛皮を採る可きで、防寒的效果も馴鹿夏毛に勝るものである。

### レーターロツク

特に汗腺の發達した皮膚を有つ點も、人類が嘗てトロピカルアニマルであつたことを證明する有力なる一の條件であるだらう。犬の如く汗腺がなかつたならば、人類の堪寒性は餘程増大するのではあるまいか。冬季登山時の發汗程、不快な始末に窮するものはない。一面に白く、玉に凍り付いた氷をぶらさけた姿は、綿羊のフリースを想起せしめて、笑止しくもなるが、こわばつた悪寒さえ覺て、苦笑しながらも、負重の増すのを感じるのが辛い。汗の發散を防ぐレーターロツクは氷の天ぶら揚げから逃れるには最適である。表面平滑で觸感の佳い、軟柔輕快なる羊馬皮は、此種の用途に最適するものであらう。



# 日本山小舎誌

(一)

劉 田 不 忘

## 藏王小舎

一

それは全くスキーのために天の造りなしたと思はれる快適なゲレンデの数々、滑降を誘ひ込むやうなタンネの布置その中の素晴らしい粉雪、否只そのみかは、其處の特殊な氣象に依る種々の變化に富む興味深い積雪相と雪質、そして何よりも印象的な、怪奇な雪坊主——そうした特色を持つ藏王山は、低い乍らに我々を魅きつけて止まぬものがあるのであつた。而もつい近頃までは、そうした本當の藏王山を味はふには、根據地岨々温泉は少し遠すぎる憾みがあつた。何處かよい處にスキーヒュツテを持ちたい、そこ

を中心に思ふ存分、且つのんきに、あの雪坊主の中を馳せ廻つて見たい！ 又五色岳の端にもしがみついて見たい。そうした希ひはそこに遊んだ者の誰しにも懐かれたことであつたらう。そのつもりもつた動かせない強い願望の値は、やがてこのさゝやか乍らたのもししい「藏王小舎」を生ますには居なかつたのである。

二

愈々建てるに決まつて、先づ皆の望んだのはその充分利用價値のある場所の撰擇であつた。いろ／＼の場所が話題にのつた。幾度か四季を通じて實地の踏査も企てられた。兎も角出来るだけ南藏王に足がのびし易い處にと言ふことが第一の條件であつた。それまでの南藏王はほんの僅かの

機會しか峨々からは許されてゐなかつたから。そしてその方面にこそ最もスキーに適したゲレンデの展開があつたら。そこで始めは杉ヶ峰のあたりか少くとも刈田峠のあたりの、雪に包まれたタンネの森と廣々としたゲレンデとを

すぐ近くに持つた場所が希望されたのであつたが、費用の方面の制約や、林區との關係、水の供給の點などから最後に擇ばれたのは次の箇所であつた。則ち刈田岳東側の中腹(1740m)で陸地測量部五万分の一上の山圖幅に於ける硫黃

製鍊所記號の極微西南。現地に於いて製鍊所跡の開けた平地より西南に小澤の凹みを二つ越して約百米その林の中にはポツカリと立つたトーテンポールが我等に小屋の所在を笑ひ示す。峨々温泉よりは、夏は上の山林道が、冬は略之に沿ふ紅白染め別けの標識が、三軒半、三時間の樂な行程を導く、山麓の遠刈田汽車よりは約六時間。朝仙臺をたてばその夕飯はこの小舎でユツクリとれるのである。近くの刈田岳へは二軒、高距四百米強約一時間、熊野岳へは更に一・七軒、約四十分、南方杉ヶ峯へは三・五軒一時間半内にて達し、屏風岳へは更に一・五軒、杉ヶ峯より一時間を要せずして登頂し得る。南藏王をよりよく享樂せんために

は尙少しく里に近き憾みなきに非ずであるが小舎無きに比し、數等優るは言を俟たぬ。

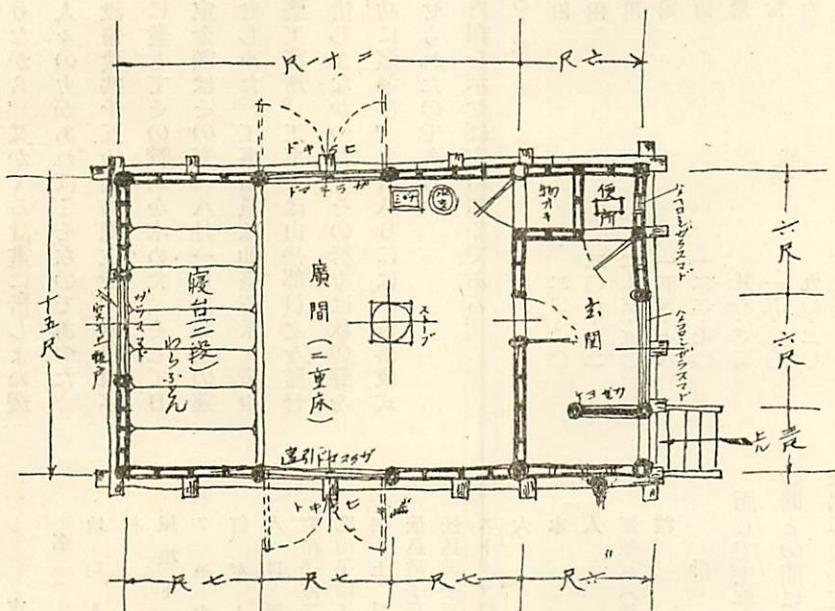
この小舎の出現によつて藏王のスキー史は一期を劃したと言へるのである。この小舎を中心としてのスキーコースに就いては他日、スキー地圖と共に記す處あらうと思ふによつて、附近の案内は以上にて止めて置こう。

### 三

場所の選定と共に皆の空想を樂しませたのは小舎の設計であつた。いろ／＼のプランがたてられた。各地のヒュッテが参考にされた。そして皆の意見がそれらを次第にかへてやがて獨自のものが案ぜられたのである。設計書を描いたは東北帝大營繕課(圖版参照)小舎は九坪平家建で約二十名を收容し得る。床は地上より數尺高く、したがつて夏には階段を以てその入口に立たねばならぬ。入口についてスキー置場の細長きが便所と共に居間に連る。寢所は居室の奥に二段の蠶棚をなす。ボイラーの如きストーヴは居室の中央に。若しこれなくばダンスすら出來やう居間の廣さそれはこの小舎にしてはやゝ大きに過ぎると見られぬでも

東北帝國大學工部部藏王山小屋の平面

縮尺百分之一



ない。北の窓よりには食料棚と炊事場が。窓からは黒々としたタンネンが見えるのみ。南の窓よりには荒削りの机が一応。晴れたる日には、らゝを通して屏風のスロープが我々を招き、吹雪ける日には、風雪、窓をたゞきて我等を威す、しかし如何に荒れやうと四邊は千古の杉の林、ストーヴの煙はわづかに吹きまはされるに止るほどの安全地帯なのである。藏王の爆發を恐れるの外、雪崩に押しつぶされる心配等は全く不要である。

四

かゝる計畫に當つて一番心を悩まし、企てを拒むものは經費の問題である。色々の問題が、難關が、我々の前にあつたしかし案するよりは生むはで、その費用の總てが學内の寄附によつて充當することを得たのは喜ばしき限りである。それ

は計畫者の熱意もさりながら、又かゝる計畫に惜しまぬ援助をあたへた學内の人々の力があればこそなのであつた。

計畫では概算費用設備費共千五拾圓の豫定で、昭和四年六月に趣旨書を學内に發してその賛助を求めた。そして日ならずして集つた所定金額はその夏の八月一日に起工の運びにまで計畫を進捗せしめた。工事請負は仙臺市米ヶ袋中坂通六の山田正治建築事務所。工事中は山岳部員之を監督し、且手傳ふに力を惜しまなかつた。その努力は秋の聲を聞かすして小舎の竣工に迄運び、九月八日には小舎落成式がさゝやかながら催せられたのである。

小舎建造費會計の内譯を示せば左の如くである。

収入の部	
本部 寄附	二〇・〇〇
醫學部 寄附	三〇八・八二
理學部 寄附	二六三・五〇
工學部 寄附	一五八・七八
法文學部 寄附	一二二・七〇
山岳部 先輩 寄附	七一・〇〇
本學外有志 寄附	一五・〇〇
山岳部 臨時負擔	九〇・二〇
計	一、〇五〇・〇〇

支出の部

名 稱	員 數	單 價	小 計
地 均 人 夫	三〇坪	五・〇〇	一五・〇〇
材 木	二四五本	四・五〇	一五五・四八
屋 根 ト タ ン	二〇枚	九・〇〇	一八〇・〇〇
フ エ ル ト	一〇枚	二・〇〇	二〇・〇〇
釘、ボ ー ト			三〇・〇〇
入 口 板 戸	二枚	一五・〇〇	三〇・〇〇
窓 硝 子 障 子 (七尺、三尺)	四枚	九・〇〇	三六・〇〇
窓 硝 子 障 子 (二尺五寸、一尺) 二枚			七・〇〇
突 上 戸 (五尺、一尺)	一枚	四・五〇	四・五〇
笹 込 硝 子 戸 (六尺、一尺五寸) 一枚			三・〇〇
笹 込 硝 子 戸 (一尺五寸、一尺二寸) 一枚			一・五〇
ス ト ー プ (煙突一式)			四五・〇〇
大 工	八〇人	二・五〇	二〇〇・〇〇
木 挽			二五・〇〇
人 夫			三五・〇〇
運 搬 賃 (鐵道、馬其他)			二〇〇・〇〇
雜 費			六二・五二
計			一、五〇〇・〇〇

而して工事經費は一五〇〇圓となり、募金による一〇五〇圓との間に開きを示したが、この補填は大學本部よりの支出によつて行はれた。

## 五

かくて竣功されたこの小舎は名稱を「藏王小舎」と呼ぶ所屬は創立當時は東北帝國大學山岳部、學友會解散後は東北帝國大學體育聯盟山岳部の保管の下にある。

その使用に當つての注意は左につくされてゐる。

### 藏王小舎使用規定

一、本小舎ハ登山、スキー及ビ學術研究ノ目的ヲ以テ建設セルモノニシテ本學外ノ一般登山者ニモ差支ヘナキ限リソノ使用ヲ許可スルモノナリ

一、本小舎ヲ使用セントスル者ハ左ノ要項明記ノ上當山岳部ニ申込ミ使用證及ビ鍵ヲ受ケラルベシ

1. 所屬學校名或ハ團體名

2. 使用者氏名（責任者ノ住所氏名ヲ別記スルコト）

3. 使用豫定時日及ビ日數

一、小舎使用者ハ左記ノ條項ヲ嚴守セラレタシ

1. 火氣ニ對スル細心ナル注意

2. 小舎内外ノ清潔並ニ整頓

3. 小舎附近ハ國有林ニ屬スル故濫ニ伐木セザルコト

4. 維持費燃料費ノタメ一人一日金貳拾錢ノ使用料ヲ申受ク（鍵返却ノ際納付セラルルコト）

一、小舎備付ノ米ヲ使用セル者ハ一食ニ付キ金拾錢ヲ支拂ハレタシ

東北帝國大學體育聯盟山岳部

現在小舎ノ鍵ハ峨々溫泉ニモ保管ヲ依頼シオケリ

尙ほこの小舎の水の供給は夏及び雪少きときは小舎裏の小沼を以ても出来るが積雪嵩むに至れば約百五十米西方の金吹澤に依らねばならぬ。この點やゝ不便でもある。燃料は林区の拂ひ下けになるものを毎夏床下にストックして之にあてる。食料は米及味噌等の主要食料は毎夏之を運び上げて貯めてあるが、副食物及嗜好品の類は宿泊者各自の肩をわづらはさねばならない。寢具の類も、大抵の場合は何とかなるが、快眠を期するならば軽い毛布か寢袋を持參するのが安全であらう。

## 六

かくてこの小舎が出来てからの藏王は一際増した楽しみ

を遊者に與へたのである。そして小舎には簡素な一冊の手帳が備へつけてあつて、之を訪れたものの記名を待つてゐる。山の祝福をうけた若者等はその紙面にその嬉しさを惜しみなくブチまけるのであつた。次には小舎が出来た最初の喜びを傳へたものを掲げてこの小舎の紹介を終らう。

## 七

「藏王小舎の手帳(第一冊)から」

昭和四年九月八日

藏王小舎落成式

阿部久三郎(工)前部長、近藤正二(醫學部衛生學教室、良峻會旅行部長)、川合眞一(理)、福田昌雄(理)、木村愚(理化)、横井憲一(醫)、田名部繁(工舎)、石田吉治(醫)、永井泰(醫)、菊地武夫(醫)、小川登喜男(法文)、平山砂男(醫)、安藤正一(法文) 村橋俊介(理)、堤耕造(學生課)、草野市(法文時報)

## 一九二九・九

五日の晩に小川、田名部、福田(先輩)横井、山田氏の五人で新しい我等のHütteに宿る。まだ雑然としてゐるが大變だが何と云ふ嬉しさだ! ストローヴを焚く、よく燃える。こんなことなら金吹澤にcampを張つてゐる大工

連中も連れてくればよかつたと思つた。夜は二階の寢臺に眠る。雨降る。

六日、午前中に大工の方も全部了つた。美しく霽れ渡つた天氣、正午、大工、山田氏歸る。午後安藤平山來つて新しいHütteに入る。

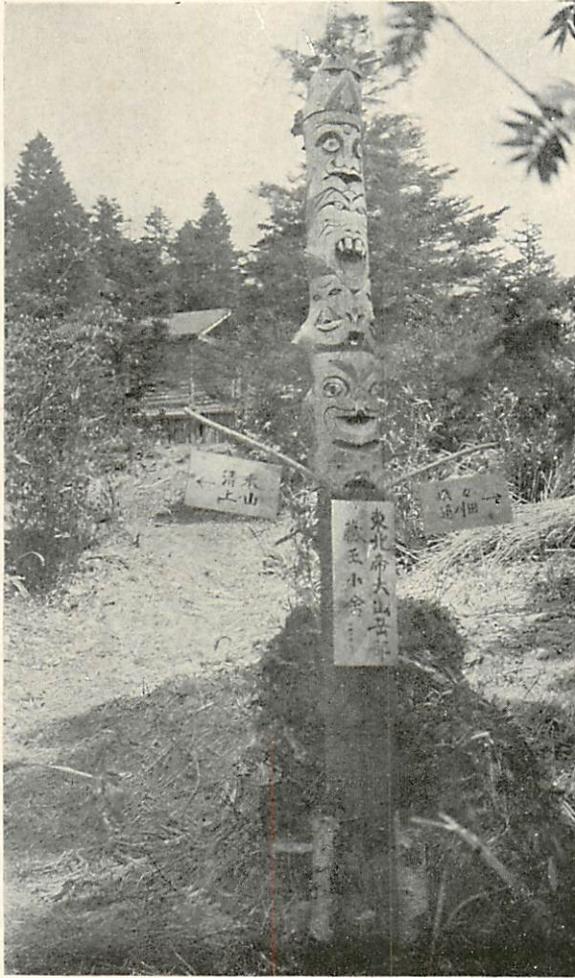
## 九・九

Berg Halli Oh, Berg Berg, mit Tannenbaum

六日の日の美し、Abendröteを思ひ出す。屏風と後鳥帽子の片面のTannenが黄金色に映えて屏風の左手の急なHangは淡黄色の實にくつきりと暗い影を投じてゐる。あの時は山の幸によつて胸一杯だつた。Arbeitが身を引き緊める。落成の日が間近だつた。併し今日は山のGeizを失つた様に皆食糧のないためかふ抜けた様になる。一日霧小便で、ほんやりしてゐる、よくないな。太初に言葉ありきでなくて行業ありきだ。山のGeizはTatだと體驗が云ふ。Tatを失つた奴は山を去り給へ。ハイ。

長い様な短い一日が過ぎて行く。明日は山を下らう。

— O g a w a —



藏王小舎のトーテムポール

刈田不忘

九・一〇

横井の豫言適中して大雨。雁戸の夢もアライン・ゲーエンの感激も大雨に洗ひ流されて了つた。貝の罐詰に梅乾でお茶づけも食つた。さあ猿又一つになつてさつさと山を降らうか。ヒユツテよ、さらば。

— Hirayama —

九・一一

我等のヒユツテ（あんまりサボツたものだから）我等の「等は少しはづかしいが」へ到々來た。東京の用事の爲めに落成式にも立會ふ事が出来なかつたので全く男がすたつた様な氣がしてこの數日間は氣が引けて仕方がなかつた。諸君よ！吾郷はかくまでに心を痛めて居ます。許し給へ。サボツた罰だか何だか知らないが今日の荷物は馬鹿に重かつた。遠刈田から何邊休んだかわからない。何しろ朝仙臺を七・三〇に出て小舎に着いたのは三時過ぎと來てるからひどい。新道小屋の下手で横井に會ふ。先日まで居た連中は昨日の猛雨の中を歸つたそうだ。横井を誘惑して再びヒユツテへ連れ歸る。始めて見る。いゝ小舎だ。心からの讃辭を呈す。皆歸つた後で錠が開かない。仕方なく窓

からしのび込む。明日俄々へ降りて錠を取つて來よう。夕食は山海の珍珠——昨日まで居た連中の顔を思ひ出す。鼠でも食物がなくなれや移住するからねえ——と云へば大變な御馳走の様だがその邊はよろしく想像して呉れ。コーヒーターが終れば俺等は寢てもよろしいからね。

— Agoo —

一九二九・一一・二三

又來た。すつかり雪化粧をして、見違へる程綺麗になつたなつかしい *unsere Tütte* がトームポールと *Tannen* の葉にどつしりした姿を見せた時、又來たよ、と獨言ちた。そして、何とも知れない安堵と満足と云ひ知れない喜びが身を振はす。夕暮の残映の中に雪雲にかすんだ屏風と烏帽子がなごやかな金色に煙つて風もない雪の靜寂に *Hütte* の影が濃くなる。夜になると、いつのまにか美しい星空になつてストーヴの音が *Hinterleben* の *sipico Freund* をかきたてる。來る度に段々揃つて行き今度の十二月の合宿が待たれる丈だ。今日はすつかり愿ちやんに當てられた。彼又ワックスをつけて、暗い中へ出て行く。雪は再び結晶して申し分ない *Condition* だ。

— 小川 —

消耗を湯に入つて癒すべく昨日は小林さんと峨々に降つてのびた。我々を待つて居た様に、甘酒とお汁粉とが出た此の日 *Little* では、一行と共に昭和五年を迎へた。彼の愛すべき老雞を食はんと、涙も初日のストロウのくすぶりに盡きはてた狼連が牙を磨いてゐる日なのである。

壘の上に長々と明くれば今日の陽は高かつた。大晦日以來の新聞、小豆一升、砂糖五〇〇匁、梅干數十個、バット六、ビール六を二人でザツクに分けて擔ぎ、我等は *Little* に汗を出して登つた。

先の日暮れかゝる頃、打ちつけた道標を見つつ晴れた日の下を歩むのは愉快であつた。*Little* へ一時に着く。春吉君一人だけ。皆は熊野へ出かけたと云ふ。一時半刈田に向ふ。三時頃上に着く。雲間を通して陽が西の平の雪を染めてゐた。太平洋方面もよく見えた。飛雲が紫色に變じて行く頃、頂上に心残つてか度々轉びながら降つた。晩の飯は靜かに三人で食べた。時計の音だけしか聞えない。つらゝは落ちて了つた。

春吉君は用が済むと六時半に寢て了つた。今夜は非常に

暖い。熊野へ登つた連中は到々峨々へ遠征したものと見え歸つて來ない。

— Morita —

徒然なるままに駄辯り一節 — 熊の事 —

冬は熊の心配もないが春になつたらこの邊りは早速熊の勢力範圍になるのだからまんざら他所事ではない筈。

熊は伶俐な動物です。肉食です。人に危害を加へる事がないとも限りません。熊はこはい動物です。この邊りの熊は黒い熊です。胸に月の輪があります。で、

熊の奴冬籠りする前には素敵に早くから準備をすると云ふ話。春です。雪の下から笹が頭を出し初め、タンネが雪を振り落して暖い陽光の中に呼吸し初める時、吾等の親愛なる親父もその冬籠の穴から世界に跳り出します。冬又冬籠りする時までは彼の世界です。美味い竹の子が彼のためにすこやかに生長し、人の子も或時は彼の胃袋を充分満す様にすこやかにオガつて彼を待つてます。熊の奴穴から出ると早速傍の松、偃松、榊、樅、青森トド松の木の皮を爪で引掻きます。どうしてつて。待つて下さい。もう少し待つて下さい。そして春の暖かさが過ぎ—雪もとけ—暑い焼

くやうな夏が廻つて來ます。陣竹の竹の子が熊をどんなに悦ばして夏になつたでせう。金吹澤の清冽な水がしみ入る様な快さで熊の喉を沾したでせう。夏もやがて行つて秋です。實つたツガザクラ、ガンカウランの實も熊には嬉しかつたでせう。栗や柿の實も（若しあつたら）。然し決してこの頃の熊は安心して歩けません。

山麓の村からは銃を肩にした數群もの人々が山の頂の方へ卷く様に陣竹をならして登つて來ます。熊取りです。熊は迷惑だが、人々には實に獵奇的なそして何と經濟的生產的な仕事なのです。だつて三十貫もある奴は三〇〇圓からになると云ふのですから、その受難の幾旬かが過ぎるともう秋も何時か過ぎて小雪が降り初めるのです。冬籠りの時期になつたのです。惻巧な親父は春先に引掻いておいた木の所へ行きます。そこにはもう松脂、偃松脂が、榲脂が、椴脂が、青森トド松脂が美しいメノウ色をして垂れ下つてゐます。熊はそいつを腹につめこむのです。―そして必然的に糞ヅマリと云ふ結論に迄進むのです。糞ヅマリになつたらべめたもの彼はやたらに食べます。むしろ呑み込みます。―だから命の惜しい人は御用心、御用心、―腹が充分

に飽和し、喉まで食飼でつまつた時、彼は冬籠りの穴にもぐり込みます。地上には數尺の雪が積つて、童顔の美青年がスキーを走らせる時、かの愛すべき殺人者はその下で快い墮眠をむさほつてゐます。そして又春です。穴から出てくると木に爪で引掻き痕を作ります。そしてこの話の結びが來ます。

その時親父が木の下に落した糞は實に *feces* なのです。成分は殆んど松脂であり、偃松脂であり、榲脂であり、椴脂であり、そして或は青森トド松脂であるために試みに點火するなら、芳香をあげて燃えると云ふのです。何處か外國（多分西蔵とか、ネパール、アイルランド、アイスランド、アビシニヤなんて所でせう）では牛の糞を燃料とするとかや。東北帝大藏王小屋でも春先糞狩りを行ひ、燃料としたらよい事と思ひます。即ち春先の親父の糞は絶好の燃料なりと云ふ學説を紹介しました。只何故春先脂がとけるかは疑問です。この *hite* を訪ねられる専門家の明解を是非伺ひたいのです。

何時も下駄らぬ駄辯りをしてゐる二高の山澤

一月五日夜十二時

## 藏王小舎の印象

その小舎の一日は、午前四時の寒氣が序の曲だつた。夜通し誰か彼か代りばんこに起きて焚くストーブも、此の頃には大低消え勝ちで、零下幾度の冷たさが私等の脊中をつきさすのだ。そうして、トウ／＼誰かがノコ／＼寢床から下りてストーブをガタ／＼いはし初める。其の音に眼をさますのは春吉さん。ドレ／＼と言ふ様な恰好で先づ火がポ／＼／＼焚かれる。そして六時には、御飯も御つゆも出来上つて、皆の起床を待つてゐることだ。町では、學校なんか十時始まりと言ふことにしてゐるらしいみんなも、その頃にはみの虫の様な寢袋の中から這ひ出てストーブのまはりにはねほけ顔を並べる。口や顔なんか洗ふものは、そこでは異端者なんだ。そして「お早やう」なんて挨拶をする者はゐやしない。「天氣はどうだい」それが一番みんなに切實なピツタリした言葉だ。窓ぎはに太く長く下つたツララがきらきらと輝き、樅の木にもつた雪のかけが濃く、御天氣だとなると、みなは聲はおのづとはづんで、アザラシの皮も一層キュツとスキーにはりつけられる。ルツクを背に

した姿が *Scenery* と林の中に吸ひこまれるのが窓から見えるのはそれから間も無くだ。一昔前には頂に達することが問題だつた刈田あたりへは一時間チョットの樂な登行だし、暇々を暗い中に出ねばいけなかつた杉ヶ峯や、屏風の方だつて、一日でノンキに遊んで來られる様な所にその小舎はたつてゐるのだ。みなは氣輕な氣持で、夕方の爐邊と談笑を樂しみに思ひ思ひの方向にその氣儘な足を伸ばすのだつた。併し窓のツララが不透明な鈍い光を放つ朝、霧でむかひの後鳥帽子が見える日、そして又小さな雪びらが窓ガラスをサラサラ鳴らすあしたは、折角前の晩に手入れされたスキーも、主人を待つて、徒らに長く、玄關ぐわんに立たされねばならない。そんな日は、古い「新青年」や「文藝春秋」が引つぱりだこで、頁がスリ切られ、多くもない「優待」が意味もなく消費されるのだ。すこしあたりが穩やかになつたとして三々伍々のスキー姿が程近い後見坂に、穴を明けに出かけたり、附近の澤の様子を見にブラリ行く位がそんな日の落ちだ。「重役」をきめこんだ連中が暖いお茶でもわかす頃になると、外で *"Pantane"* とスキーの雪をはらふ音がして、やがては入つて來るのは、眞白になつた「

御でかけ」の連中だ。少し高く遠く行つた連中はマツ毛を氷でくまどつたり、眉毛をサンタクロスのちいさん見たいにさせて「よく滑つたぜ」と歸つて来る。天氣のいい日は勿論、そして、天氣のよくない日には尙更、遠出からその小舎に辿りつくのは、たまらなく嬉しく、懐しい事なんだ山の上ではどんなに寒くとも、又どんなに吹いても、この小舎のほとりだけは嘘の様に靜かで穏やかで平和なんだ。それは年老ひて丈高い忠實な Tanne の森にかこまれた中にあるヒツヤカな住ひ。アラスカに見られるテムボールのやうな標木から上に登るとその真正面の深く、美しい森を背景にしたその小舎は空想に盡く、Hütte そのものの姿だ。煙突から立ちのぼる紫のフサ／＼とした煙りが冷え切つて山から歸る連中を先づ暖めるに違ひない。ぬれた物をストーブの上の針金にかけ終つて、丸太に腰かけに疲れた身体を下した時からの數時間こそ小舎の生活の最も楽しい時になる。その日の楽しい色々が「ヨタ」を交へてストーブを取り巻く。誰も一言一言が皆の顔をほゝえまし、笑はせるほど、その時の気分は軽く明るく、好いものなんだ殊に晩食のときのたのしさ。御給仕の春さんの急がしい程

お代りの大きな「コジキ椀」が代る代るつき出される。それは最も感謝すべき一時だ。「心」のあるかたいごはんでも、「からい」御つゆでも、何でも「優秀」の讃辭と共に急行列車の石炭みたいに口の中につめこまれるんだ。やがて「紅茶」だ「コーヒー」だ「ボスタム」だ。そして其の後の意墮な暫らく。寢床にねそべつてスツツと輪を吹き乍らバットを樂しむ誰彼、手作りのギョチない机によつて「Hiltentuch」にそこはかとなく、なにくれを記す者。——  
Bain — と小銃の様な音をたててさけた窓上の板壁を見つめて、それに何かして、山の繪でもかゝつてればいいなあと思ひ、それから入口の戸の上には是非とも「トナカイ」の角を飾りたいなと考へつづけける者。いゝ氣持になつて、ウロ覚えのドイツ語のライドを口吟む者。それに和してコールする者、モク／＼として頭をおさへてかがる奴は何を考へてゐるのだ。里心を出して喰ひ物の話をするのは誰だ。etc, etc, etc, ……  
やがて「寢たくなつたあ」と Schlafack にもぐりこむ者がでて来る頃になると「あす」を待つ人等は、油やワツクスを持ちだして、スキーや靴の手入れだ。そして水を流

しに Porch に立ち出でた者の言葉が、其の人等の顔を明るく、暗くする。「降つてるぞ」などと言はふものなら、シヨゲちやつて明日は峨々へ降つて一風呂としやうかなんて誘ひかけるケシカランものも出て来る。「星が一杯だよ」と云ふ聲に明日を約束された氣になつて今更らしく地圖を見なほす者もある。瞬きもせず氷りついたやうな星が満天に散りばめられ、後えほしから屏風へのなだらかな曲線が黒々と空を畫し、窓際の樅の木に積つた雪がもれる燈火にほのほのと明るんでゐる様な夜の小舎のほとりは「山小舎」の求めて得られる氣分の最上なものだ。それが月の淡い光がタンネのかけを薄くサツト蒼白い雪面にうつす時は

Morgenhalet der "Mondhellnacht" が思ひ起されるだらう。

又 Orion や Swan でもがキラメイてる星づく夜には

"Oh, Da mein holder Abendstern" と口笛にうつす者もあるだらう。そうした夜の外は全く静寂そのものの世界だとして時折吹き渡る谷風に、樅の梢がサツツとなるのに寒氣を感じて小舎の中には入る頃は、幾つかの「ミノ虫」が上にも下にも、すこやかな「イビキ」をたてて寝込んでゐるのだつた。

時折聞きすてならぬ寢言を言ふ者や、雪庇から落ちた夢にうなされてゐる者もある。 *Qui-qui* と齒ぎしりする音の氣味悪きこと。時計が十二時の上に兩針を重ねんと、 *Fier-Tack* 急ぐ頃は *"Batin"* (板の乾き割れる音)、 *"Pit-putu-Onya"* (薪のもえる音) *"Hu-Hu"* (寝いびき) *"Munya-Munya"* (寝ごと) *"Un-Uu"* (ウナナレ) 等々が小舎の静けさを破る不協和音だ。それがそしてきまりきつた一日の *"Pinte"* なのだつた。

小舎は暖い。今夜は、胸に手をあてて、 *"Schnee Wand"* でも登る夢を見やう。 *Empori* として *Hinabi* 更に *Bergheili* ついでに *オーヤースーミ* 。

— 小舎を去る *Vorabend* に — *Y · S a s a* —

白鬚の生えし侏儒等は踊るらめ  
音なく積る雪の山夜に。

バチノとストロブの燃ゆる山の夜に  
雪はいつしか降りそめしやら。

— 一・九 —

— 深町氏 —

私が仙臺に居る時はブランの何分の一、何十分の一、山に行かれたであらう？ 他に色々原因もあるが、最も行かない原因は相棒難だつた。峠歩き？山路歩き？そんなものには相棒はいらないかも知れない。併し、探るべく深味を持つ山は、日本の山とても相棒の必要を斷然認めるのは誰人も異議のない事と思ふ。相棒を廣く求め、廣く機會を作る事は、有効でもあり、必要でもある。その爲めに現役の仙臺の方々は個人としても、部としても、第二高等學校の部の人達と常に接近する事を極力おすゝめする。(之は二高とても同然だが)常に二高の人達(山の)と親密にならん事を御願ひします。そして山に行く機會を巧みに利用する事を御奨めします。我身を省みて老婆心から。

九日夜七時十三分過

ストーブを圍んで、Hiteは斷然風があたりらない。

深町さん曰く、翌朝尻が直つたら歸らない。

小川 天氣が好ければ歸らないぞ。

田名部 何か食ひたい。

ジョージ 尾骨がいたい。(時々立つて悲鳴を

あける。)

ヨコキ

氣が向いたから茶をいれよう。

藤枝

(沈黙) 次郎さんの本をよんでゐる。

春吉さん

(沈黙) 變なHiteで煙草をのんでゐる

一・一一

夕暮の一時、山に入つてからもう半月にもなるが。こんなに靜かな、美しい夕暮を生活したことはない。そして……あたりには、總て柔いPuritaがあつた。雪に埋れたTannenがあつた。自分の心はHelterになつた。そしてむやみに歩きたくなつた。山の中にある氣分がにじみ出して來る様だ。

白い月が黄金に變つて行く。空の赤は紫となり、Paleとなり、次第に夜の中にとけて行つた。

もうHiteを見下してゐる山々の姿も薄墨の様にオブスキュアになつて了つた。Hiteの窓に赤い火が入つた。自分のスキーは心地よい音をたて、Tannenの間をすべつた。

自分がこのHiteに來てから、色々な人々が入れ變り訪れたが、それも次第に薄らいだ。そしてもう訪れる人がなさそうだ。半月山に入つてゐたら、益々里に出る氣がなくなつた。あくまで山に居よう。 | Tanabe |

一・一一

峨々からの道は夕闇に白かつた。刈田も熊野も男壯に、併し靜寂に、雲を中腹にはわせてゐた。遠く太平洋はどんなよりした空の中にとけこんで見える。遠刈田温泉の電氣がきら／＼暗緑の中に光つてゐる。四人は黙りこくつて粉雪をけつて進む。Stoike と Ski のきしる音のみが聞える。自然は、山は、吾等の Yao は absolute Ruhe の中に四人を抱擁してくれる。

四人の心それも 'Ich' を忘れた Ruhe であつたらう。雑木の梢は靜かに呼吸してゐる。さゆるぎもしない。時々高く山より吹き降ろされる風は 'Berg und seine Kam-eranten', とつゝやく。

— Ken —

コック長（深町先輩）熊野越しの計畫も天氣が悪くて駄目になつた。悲しげな顔付で下山となる。コック連中見送りに行く。とてもよい雪だ。一飛びで峨々迄下る。今年のシーズン中で一番愉快な道歩きだつた。

すき腹にやつた Bear がきいて晝飯が食へぬので、歸りの登りに大いにへばる。ボンヤリした月の輪を見上げながら、フラ／＼になつて歩く。Stoike の先が月光に光るのが美しいなあと思つてゐたら、眼がくらんで頭の中がぐらくした。やつぱり腹の空いた時は駄目だ。

Abend Deme が一つ俺達を見下してゐた。Hütte に歸つてうんと食つて見たが、すき腹で Arbeit した爲めの Fatigon はなほらぬ。今度俺がコック長となつた。George の働くことは氣がふれた様だ。よい傾向だ。何かうまいものを食はふかな。

明日は山を降りねばならぬ。山小舎に居れば居る程、都に歸りたくなる。併しそれもまゝにならない。

自分達に數日間親しく接してくれた、山々に想ひを残しながら山小舎を去る氣持は、きつと大きい喜びとなつていつまでも自分の中に消えないであらう。

— Tanabe —

一昨年十二月以來、美しい Tannenwald の間に眠る此の小舎の姿を、幾度想像した事であらう。そして八月に勇ましい大工の聲や、チヨーナの響を耳にしながら、小川と二人で働いた當時、うすら寒い金吹澤の天幕で想を廻らしたのは、やはり雪に埋れた此の小舎の姿だつた。

平山と二人で場所選定の爲めに、人夫を連れて、此處へ來た。七月の暑い頃、丈を壓する熊笹を分けて、やつと此處へたどりついた時、丁度このストーブのあたりに、大きな枯木が一本生えてゐる事をはつきり覺えてゐる。そして

石楠花の堅い枝を拂ひ乍ら、不思議な興奮に胸はふるへた木びき十數人、大工五人の金吹澤の天幕生活はひどい雨の降つたこともあつた。

十七日間に渉るその年の上高地のベースキャンプで、生活で、岩ばかりあさつてゐた自分にも絶えず藏王で始まつてゐる小舎の工事が考へられた。たつた一人最後迄残つた上高地で、ひどい暴風雨にあつて、まんじりともしなかつた一夜、やつぱり此の小舎の事を考へてゐた。愿ちやん、小川に八月廿二三日頃、此處で會つてから、九月十日に落成する迄、小舎の生長を見た。或時は自ら *Hunter* を取つて釘を打つた。そして小舎は出来た。

僕等の苦心を想ふ時、ほんとに夢の様な氣がする。併しこの苦心も、何でもない。僕等が小舎を愛する心が強かつたのだと思ふと。

今自分は小舎の窓から *Tannen* を眺めてゐる、そして色々な事を想ひ出し乍ら、甘い考へに溺れた。

(一九三〇・二・一〇) — *Tanabe* —

### 三・二四

サツキから、ジツとローソクの瞬くのを見てゐる。空氣の流れで、急に左右に振れたかと思ふと次には落ちつく。か

と思ふと思ひ出した様に上下に *oscillate* する。面白い。  
*affinity* はよさうだし、一人で山羊様のビールをやつゝけようかと思つたが、それぢや、餘り社會に濟まない様な氣がしたから、明日の晩、一杯づゝやる事とする。

二階のシュラフや毛布を皆ひつぱり出してベットを作つて見た。先づ下に毛布を三枚程敷き、毛皮のをせ、その上で毛布入りのシュラフにもぐり、上から毛布を二枚かけた。何だか王様にでもなつた様な氣がして、スツカリ喜んぢやつた。一人でニコ／＼してゐるんだが、誰も知るめえ口惜しかつたら本當だと思へ。之で今夜をキサキに迎へる夢でも見るかも知れぬ。

そんな事を考へると又明日尾骨を打つかも知れぬからシマル、眼がサエちやつた。鏡がないからわからぬが、綺麗な眼が冴えたんだから、とても澄んでるだらう。

雪はもう降らねえ。風も何もない。ストーブはチロ／＼燃えてる。

ぢや愈々コソク長、兼火夫、兼水夫、兼掃除夫、兼スキー家、兼客人は御やすみになる。皆の者遠慮してよからうぞ。「ハハハッ」なんて家來はねえや。

お山の大将のお休みだ。

— *George* —

## 右 股 の 谷

坂 本 直 行

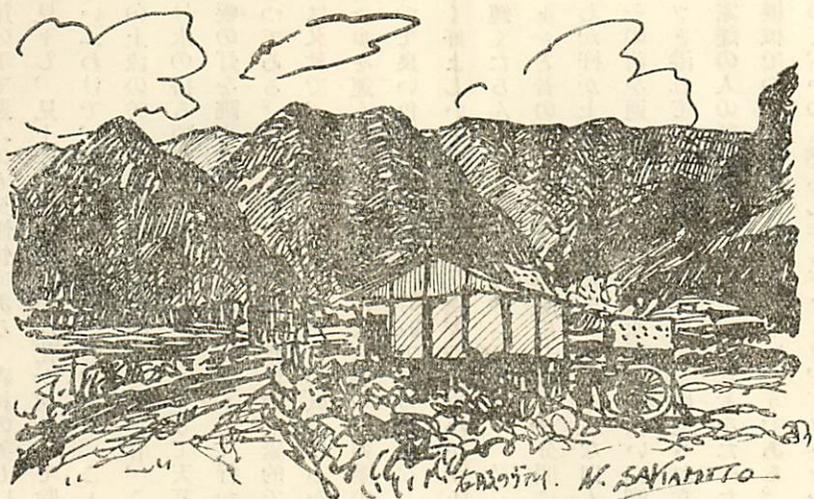
この右股とは發寒川上流のその事で私の好きな札幌郊外に於ける三つのヴァレイの内のひとつなのである。殊に残雪の見える春や、秋のこのあたりの氣持は全く愛す可くのだかである。

谷の平坦部は殆んど水田である。潤れざる水源、發寒川を有するこの谷の農家は幸であらう。

一体、谷の風景の好きと云ふものは、兩側からぐつと力強く迫つて來た山腹が谷の中、細長い奥深い平坦な土地の下へ、そつとひそんでしまふ、その調和にあるのだと思ふ例へて見るなれば、岩をかむ様な奔流が忽ち深潭の中に聲を吞んでひそんでしまふ。その氣持はよく似てゐると思ふ波亂と平穩、喧騒と靜寂、そう云つた兩者の調和に魅力があるのと同じ事だ。其處に云ひ知れぬ深さ、云ひ知れぬ平

和を感じる。

春であれば谷の奥に白く輝く迷澤・手稻連山の雪を踏む可く、ゾムメルスキーをかついで、谷の奥へ消える道を通る。黒々と耕された水田の泥からはしきりと陽炎が燃え、路傍にはコリダリスやヴィオラが咲きつゞいてゐる。奥の白い雪に乗つかる迄は鼻から汗しづくをたらしながらポコポコと乾いた緩かな道を、重いスキー靴を着けて汗にむくんだ足を曳きづる。歩るくにつれて後には石狩の平原の廣々とした眺めが展けて行くし、手稻の崖が頭の上につゝ立つて來る。いつだつたかスキーを路傍の草叢になけて汗をふいた。それは最後の農家のあたりだつた。そして今日の晝飯には味噌汁が食ひたいといふので、この農家で味噌をわけてもらつた。この家のばあさんは「おらんとこでこさ



つたのだから甘めえぞ」と心よく分けてくれた。私は買ふ積りで金を出したら、そんな事と眼をまるくして取らないので今度来る時にはそのかはり甘い物を持つてくると云つたら「學生さんの云ふ事は當にならんよ」とひやかされた。その次にこゝを通つた時、果して約束はケロリと忘れてしまつてゐた。ばあさんの云つた事は本當に當つて了つた。今度来る時と思つてたが、その次も其の次もすつかり忘れてしまつて、未だに約束はおあづかりになつてゐる。この谷の風景を想ひ出すと同時にこの事がすぐ頭に浮んで、悪い事をしたなといつも思つてゐる。

發寒川はこの谷の平野のつきる當りで、宮城澤と發寒川本流とに分れるが、この分岐點近くは美しいト、松の森林が劃然としきりをつけて残つてゐる。いや植林したものかもしれないがこの二本の川には分岐點から同じ位の距離の處に瀧がある。中學時代にはこの瀧へよく遊びに出かけたものであつた。又或夏の事、右股の奥に幼い子供達を連れだつて山のめしを食べに遊びに行つたことがある。蚊や蛇が居るからといふので蚊帳を携へ河原の柳の木の間につるして、その中で呑気に遊んだのは思ひ出しても楽しい。手

稻の崖の下で遊ぶのも又愉快である。森林の美しい、深い澤を見下し、見上げる崖の破目には花が挟まつて咲いてゐるといふわけで、なか／＼よい處なのである。こゝが一番にこの上流の美しさを見る事が出来る。友と春、この崖に雪融け水の掛る頃、そのほとりにキャンプして天幕の中から札幌の灯を眺め様とよく話したが、とう／＼行かないでしまつてゐる。朝の景色などは想ふだけでも素的である。

秋は又秋で、のびやかなこのあたりの風景に心を惹かれて度々歩を運んだ。農家の軒下には大根や玉蜀黍のよく實の入つて良い色をしたのがさけられてある景色など、たまらなく好ましいものである。又處々に水車小屋があつて、その鈍くたるんだ音が澄んだ秋の空にひびく。又ジャーツゴットンと音のする水の重量を應用した、一分間に二つか三つしか杵が上下しない極めてブリミチーブな臼も見かける。その前を通る時にはいつも、水がいつばいに溜つてジャーツと溢れては杵が動くのを見ないでは通られない。然し農家達の人の話を聞くとあれでついた米をたべたらうまくて機械でついたものはたべられないそうである。なる程と思つて、いつも感心し乍らジャーツ、ゴットンを眺めて

通るのである。

この谷には相當奥迄道がある。冬になれば馬轡道もある秋や、春、残雪を踏んで手稻をこの崖の下から登るのは實に愉快である。私は手稻山の一番よい處が見られるコースだと思ふ。圓山を八時頃出れば、晝には頂に立つて海を眺めるによいのだ。冬のこの谷の風景の好きは、正面の迷澤連山の森林美の爲に一層美しいものにされてゐる。ヘルヴェチャヒユツテが無かつた時は迷澤に一日で登るにはこの谷から登る他には無かつた。いつも朝日が手稻の崖の雪を照らす時分にはこの谷の奥で朝食を攝つた。その時の氣持や、風景を忘れられないものである。この水源から見た手稻の姿は一番自分の好む處である。そして迷澤を通りユートビヤで遊んで錢函へ下つて行くのは、私の札幌附近での最も好きな一日の山歩きの一つであるのだ。

私はこの谷に歩を運ぶ度にスケッチを試みずには居られない。幾枚も幾枚も同じ様な風景を描いたものが、何時の間にか、ずいぶんとたまつて了つた。そして私は、それを時々出して眺めてはこの谷の風景を愛でてゐるのである。

# ワイス・ホーン 點描

荒井

誠

——ワイス・ホーンについて思ひのまゝ順序もなく書き連ねて見たい——

## 1.

桃を真二つに断ち割つて、それに白砂糖をぶつかけた——とは、大朝の通常（山のオヂサン）で通つてゐる藤木九三さんのスウイスの、リーフェル・アルプから望んだ中央アルプ山系のワイス・ホーン（四五—二米）の形容だが、このシリベシ連峰の一つ、ワイス・ホーン（一〇四五米）も其の山容がごく似てゐる様だ。勿論、スウイスのワイス・ホーンと、こつちの山との格好が似てゐるから、同じ名前を名付けたものだらうが、それにしても中々面白いし、恐ろしくデツカイ、素晴らしい名前を付けたものだ、と笑つてゐるロイフェルがある。名付親は、きつとこの山の先鞭をつけ、世に紹介した北大スキー部の連中だらう。が、そ

んな事はどうでもよい。立派な名前の山が、本當のワイス・ホーンと同じ姿をした山が、日本の北海道にあると思はれるだけでも結構な譯ぢやないか。

事實、スウイスのワイス・ホーンの寫眞でも見た人は御存じだらうが、私が藤木さんの（雪・岩・アルプス）といふ白い大型の木の七六頁にある、岩と氷を鏗つた重々しく豪宕なワイス・ホーンの寫眞を見た時（似てゐるなあ）と思はず目を吊り上げさせた事だつた。似てゐる點は頂上で相合した二つの線が、力余つた様にピンと宙空に跳ね上つた形だ。

その跳ね上つた所は、丁度桃の尖つた所を見る様だ。ウーデルで見るワイス・ホーンは、まるで白いテーブル掛け

をかけた食卓の上に大きな桃を真上面に置いた様に見える。だが、こちらのワイス・ホーンは踏み潰された桃だ。これはスウイスのそれと較べて甚だ残念な事だが、海拔が低いことから、潰された様に見えるのは何とも致し方がない。然し、この踏み潰されたワイス・ホーンの桃の、あの腰のあたりの脹らみ工合は、本場のワイス以上に柔かみと落付いた感じを與へる様だ。

(雪・岩・アルプス)に出てゐる寫眞は、前景に素晴らしく大きなタンネンの樹を配してあり、そのタンネンの間に雪冠を戴いた豪壯な二つのピークをもつたワイス・ホーンが宙天に沖してゐる。今年の二月だつたか、私がこの寫眞を見てから、一人でシリベシの小澤といふ村からワイス・ホーンへ出た事があつたが、五一七邊りの森林帯へ入つてから暫くして木の間から(それは大きな白樺の木だつたが)ワイス・ホーンの尖塔が、殆んどワイスの寫眞と同じに見えるので、思はず苦笑させられた事があつた。

## 2.

ワイス・ホーンの持つ特長は、小澤の望神ヶ丘といふ丘からホルンの麓まで續いてゐる長い、なだらかなテレー

だらう。山が直ぐ目の前に見へてゐる様で、中々尾根にとりつき難い。飽き／＼する程長いテレーズだ。晴れてゐる日は、進むに随つて、山が、ゲン／＼迫つて來る様に感ずるが、吹雪の日等は、目の前にちらつく雪の舞踏を眺めてゐるだけで、身体が空間に浮んでゐる様だ。目の届く所すべて白い世界なので、スキーを雪面に踏みつけてはゐるが、感覺がない。空中で足踏みをしてゐる様なものだ。このテレーズで吹雪に會ふとどこの山での吹雪より辛いと言つた人が澤山ある。六百米へんの白樺の林までの間、露き出しの裸出地だ。北から吹きつける風は、右よりの体にばかり當つて、その寒さつたらぬ。白樺の林までの二時間ばかりといふもの、右の頬けたばかり風に叩きつけられるので漸つと森林へ入つてから帽子を脱ぐと右のほゝは黒く色が變つてゐるし、目は臭れた鱧の目の様に、氣味悪く赤くなつてゐる。私の友達のアさん等は、この山へ來る時、吹雪かれると困るといふので、片頬へあてる毛の皮を持つてくるので滑稽だ。山からの歸りは、歸りで、今度は左側のほゝを叩かれる。澤の中へ入つてコースをとれば、ほゝは叩かれないが、巻き風に會つて息が苦しくなる。どうしても

このテレースを歩む譯になる。小澤からワイスへ登つた人の間には、きつとこの事が話の種になるだらう。

3.

月のいゝ夜、村の通りから、月光に蒼白く輝いてゐるワイス・ホルンを見て、堪らなくなつてコソツとスキーをつけて家を出た事がある。キシ／＼に凍つた通りの雪道を夢中で村端れまで走る。ラテルネは燈さずとも、月の光に雪は輝いてゐる。山も谷も、そしてこの丘を取圍んでゐる常緑樹も、皆一樣に冷たい蒼い光の中で凍つてゐる。丘の上まで、はげしい息を続けながら登る。

丘の上。蒼色に塗り潰された自然の中に浮き彫りの様に聳へてゐるワイス・ホルン——ニセコアンヌブリ——。

見た瞬間、山は聲を立てるか、と思つた。自分をさへ見失つてしまふ程の嚴かな自然の鋭い壓迫——。

4.

「今日は山に登つてゐる人が見える」冬の日曜のよく晴れた日は、きつと村の人達が、かう云ひ乍ら通りで語つてゐる。眞白に體に雪をまつわらせた汽車が、この小澤の驛へ着くと、きまつてどの列車からもロイフェルが三々伍々降

り立つて来る。そしてスキーを小脇に黙々として村の通りを通り過ぎて行く。村人達は、この人々を無言の中に送る。

山へ行く人達の心には、歸り着くまで、鋼の様な、緊張が續いてゐるのであらう。黙々として山へ向ふ彼等の胸の中には、山の雪と山のもつ味はひを、今から楽しんでゐるのであらう。緊張の中にも尙明かな楽しみのある氣持、これが山へ行く者の心なのであらうか。

5.

村の端れの高原に三田牧場といふのがある。冬でも天氣のよい日には、雪原に放たれた澤山の牛が、モク／＼として日當りのよい赤い牧舎のへんで、ねそべつたり、ノロノロ歩いたりしてゐる。暖い冬の日を浴びて牛の目は可愛らしく細い。大きな體をもて餘してでも居る様な格好で、一日一ぱいモク／＼を反芻してゐる。この牧場一帯の高原は又スキーゲレンデとして優秀な所だ。なだらかな斜面に小さい白樺の林がある。その白樺の林を縫つてボーゲンを畫くだけでも短い冬日は暮れてしまふ。カンバの疎林の間に牧柵がずつと上まで曲りくねつて延びて居る。柵を傳つ

て上まで登りつめれば眺望は急に開ける。何といふ美しい眺めであらう、山は、ニセコアンヌプリを初めとし、チセヌプリ、イワチヌプリ、ワイス・ホルン。更に目を左方に轉ずればシリベシマツカリヌプリのあの端正な姿まで、さすがに容姿でこちらを眺めて居る。

低い所は大きなナラの樹の間に洩れる牧場の家並、赤塗りの牧舎や、事務所、さては牧人の家など、小さく見えてゐる。

こゝから見たワイス・ホルンは最も美しからう。晴れた日などは麓のガンビの大樹までがいち／＼指摘されるよう



に冴へて見ゆる。風のある日は、屋根の上を舞ふ雪煙りが日光を透かしてさながら燃えるよう。あの丘越へて、あの森越へてと、遙かに眺める山の雪は、憧れの糸につながつて夢の様にも懐しい。

秋も既に深くなつた。ワイス・ホルンの麓では九月下旬早霞がふつたと聞いてゐる。雪の來るのも遠くはなからう。山の想ひ出は冬にこそ懐しく、好ましい。

—一九三一・一〇・五—

## アールベルグ派の廻轉理論の疑問に就て

A B C 生

我日本のスキー界では昨春埃國からハンネス・シュナイダー氏を迎へて以來、所謂アールベルグ・スキー術なるものが喧しく論ぜられる様になつた。そして日本の隅々まで

苟もスキーに乗る人さへあるならば、誰もがフォアラードだのホツケだのと、素人解りのしない言葉を用いる様になつて仕舞つた。出版界でもスキーの本が賣れると見え、澤山のスキーに關する圖書が出版され、スキー本の蒐集狂を盛んに面喰はせたり喜ばせたりして居るが、その本の殆んど大部分は所謂アールベルグ・スキー術に關するものであるから、シュナイダーの來朝が如何に日本のスキー界に反響があつたかを知ることが出来る。彼を有名にしたのは「スキーの驚異」なる活動寫眞だ相であるが、あのフィルムの中にはシェーレン系統のシュウングだのボーゲン

をふんだんに見せて居るが、日本に來たシュナイダーはテム系統の廻轉しか我々に見せて呉れなかつた。

日本の大部分の人達は、彼の來朝によつて、彼の新しいスキー術を廣告された様な次第である。其の後各地にはそれぞれアールベルグ派の研究者を生み出し、中には研究の大家も生れ出し、このスキー術は瞬く間に日本中に廣まつて仕舞つた。

私はこの二三年間、所謂アールベルグ派のバイブルなる「スキーの驚異」を讀んでアールベルグ・スキー術なるものについて興味を持ち、そのシュウングの方法を會得し様としたのであるが、未だに未熟の爲めバイブル通りのシュウングをなし得ないのである。しかも昨年シュナイダー來朝の折、私は彼のスキー術を見たのであるが、未だにバイ

ブル通りの廻轉をなし得ないで居る。ところが最近になつてバイブルの後にある活動寫眞と類似のシュウングを成し得る様になつてアールベルグスキー術に對し疑問を抱くに至つた。それでこの貴重なる誌上をかりて研究家諸兄にその疑問の點を明らかにしその解決法を御尋ねしたい次第である。

アールベルグ派の最も特長あるスキー術の一つは前傾姿勢（フォアラージェ）だ相であるが、この前傾姿勢に關してバイブル中にフアングはシュウングの廻轉理論と共に述べて、前傾姿勢の長所はシュウングの廻轉中スキー後端を拔重することにあると言つて居る。

「體重を前方に移せば移す程スキーの後端は拔重（エントラストン）せられる。このスキー後端の拔重はスキー後端が斜面に何等壓力を加へない程度にまで遂行され得るのである。されど斯様な瞬間に吾々は顔面制動をする。この瞬間に吾々は最早斜面に直角に立つのではなく、むしろ斜面に鈍角になり即ちちつと前に傾くことになるのである。このスキー後端の拔重は體がなほも前傾なし得る程度に行はる可きである。故に前傾姿勢の最大限度は斜面に直角な姿

勢である。この様な姿勢でスキーの後端を出來得る限り拔重して我々は容易にスキーを廻轉し得るのである。」

フアングがこの一般シュウングの廻轉理論を最もよく用ひて居るのはシエーレンクリスチャニヤである。一般シュウングの廻轉理論よりもシエーレンクリスチャニヤの理論について考究をする方が複雑になることが避けられて便利であるからこれについて考究することにしよう。

バイブルに曰く

「斜面上を最大傾斜線と三十度の角をなす方向に吾々が滑走すると考へて見よう。この様な位置からスキーの滑走方向と直角をなす位置まで廻轉し様と思ふならば、吾々はスキーを平（フラツハ）にしてスキーの後部を拔重し、かくして吾々は體重をスキーの前端に移動せしめればよい。さうするとシュウングの初めに必要なる旋回（アブドレーヘン）を足の力だけで成し遂げるに充分になる。この時から遠心力（シュウングクラフト）が荷重（ベラストン）せられたスキーの前端よりも後端を速く下方へ動かす。この様にスキーの後端を速く下方に動かすので足の力が作用してスキーが更に廻轉するのである。」

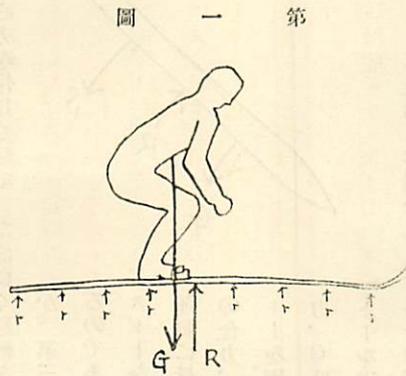
これは勿論廻轉の際に體重を乗せるスキーに就て、即ち弧の内側のスキーに就て論じたるフランクの理論である。

一般シユウングに就ての理論と大差なく、フランクの考へではシユウングの廻轉は吾々がスキーを穿かずに爪立つて體をくるりと横に向ける時の廻轉と大差はないのであらう。この理論に従つて廻轉し様とすると私は必ず顛倒し、

時にはそのために足を挫いたことさへあつた。初めの中は私は何故顛倒するのか解らず、失敗の原因を技術の未熟に歸して居つた。併しフランクの方法に依らぬ時はよく廻轉することを知らるに及んで私はフランクの理論中に幾多の疑問を生ずるに至つた。

現在吾々の用ひるスキーで普通の方法にてバツケンを中心とシユウングするとスキーのバツケンから前の部分が大となり、スキーの先端に荷重し難い。フランクは「スキーの先端」はスキーの前半を意味することであると註釋を附して説明して居るが、スキーの前半にも荷重し難い。この様なスキーを穿いて居る時に爪先に體重を移動させることにより幾分はスキーの前半に荷重し得るにしても、フランクの言ふ程度に後端の拔重がなし得るであらうか。第一圖は之

を説明するものである。スキーが雪の上にあるときはスキーの各點は雪に支へられる。rは雪がスキー滑走面を支へる力である。Rはrの合力でスキー滑走面で雪に接する部分の中央に作用すると考ふ可き力である。Gは體重の力でこの圖では體重が爪先に乗つて居る場合である。此の圖で

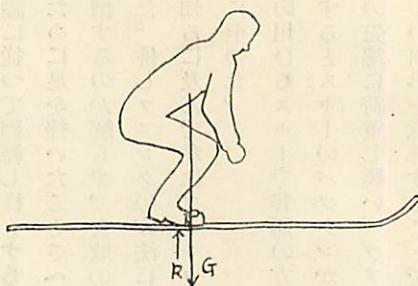


フランクの言ふ様にはスキーの先端に荷重し難いことが解かる。

假令フランクの言ふ様にスキーの先端に荷重し得たとしても、スキーの後端に體の遠心力を作用させ得るであらう

か。スキーの先端に荷重しスキーの後端から拔重するには第二圖の如き關係にあつて、體重をつま先に乗せねばならぬ。この様に體重を爪先に乗せて居ながら體の遠心力をスキーの後端に作用せしめ得るだらうか。極端な例を取つて

第 二 圖

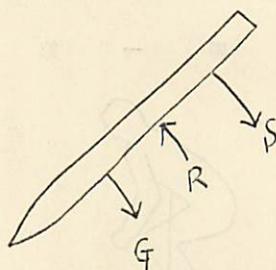


考へて見やう。スキーの前端に最もよく荷重し後端を拔重する典型的の姿勢は爪立つ姿勢であるが、この様にしてスキーの後端に體の遠心力を作用せさる得るであらうか。斯う云ふ場合遠心力は體重の乗る部分に作用しないだらうか。ボディ・スウィングは遠心力を體重の乗つて居る部分に働

かせる様に體位を調節するのではあるまいか。

シュウングの廻轉はスキーの後端を前端よりも多く滑らせることに依るものである。前に述べた二つのことが可能であるとしてもスキーの先端に重力を作用させスキーの後端に遠心力を作用させて、なほ良く廻轉を成し得るだらうか。第三圖は之を説明する

第 三 圖



のであるが、 $R$ は雪がスキーを支へる力と廻轉運動に抵抗し様とする力の合力、 $S$ は遠心力でスキーを廻轉させ様とする力、 $G$ は重力によつてスキーを滑らせ様とする力

の中スキーに直角に作用せんとする分力であるとする、 $S$ が $G$ より大なる時はスキーの後端は先端よりも速く滑るが、 $S$ が $G$ より小なる時即ち遠心力の小なる時(速力が鈍く大きな弧を畫いてシュウングする時)は廻轉し得ないことになりはしまいか。

この様に考へて來ると、私にはフランクの理論は疑問だ

らけである。併し今このフアックの理論が全盛と思はれる程一般に行はれて居るのであるから、私とは別の考へ方で廻轉のなし得ることの説明が出来るのであらう。それで私は研究家諸兄に御伺ひしたいのである。

一方上述の種々の點から廻轉理論を見て更にこの疑問の生ずる原因を追求して見ると、それは體重をスキーの先端に乗せ様とするために私の理論の上で無理を生ずることがわかつた。それでフアックとは反對にシュウング廻轉の際に體重を踵に乗せることにして見た。すると私の理論の上では無理がなく廻轉理論が説明出来る様に思はれる。

現今吾々の用ひるスキーは先にも述べた様にバツケンから先の部分が長いのである。最近流行しかけて居る前方移動締具 (Vesetale Bindung) でも同様に第一圖に示す様にバツケンの前方にスキーを支へる力の合力のRが作用するのである。スキーのシュウングの廻轉はスキーの後端を先端より速く滑らせるのであるからスキーの後端には先端より大なる力が作用しなければならぬ。又その力の差が大なる程廻轉は短く行はれる筈である。そのためには現在吾々のスキーを用ひて少しも不都合は生じない。爪先に體重を

のせてもなほスキー後端が餘計に重力に作用されることは第一圖で御解りのことと思ふ。それを踵に體重をかけるとスキーにRの作用する點から遠くの方に重力Gが作用することになり力が一層有効に用ひられることになり、又一面には踵に體重を乗せることにより遠心力はボディスイングの作用で踵に作用することになる。スキー後端には何時も大なる力が作用し得るのであるからスキーが廻轉しても理論の上に不思議はない様に思はれる。

私の經驗によるとこの理論によりフアックの方法をシェーレンクリスチャニヤの内側スキーで「荷重」と「拔重」とを反對に行つてシュウングを始めたなら容易にシュウングをなし得たのである。これによつて私はフアックと反對の方法を諸兄に認めていたゞきたいと思つて居る。併し之は私の考へ誤りであらうか。誤りなしとせばフアックの方法と私の主張する方法とがいづれが容易になし得るかと云ふ點について比較研究していたゞきたい。

現今全盛を極めて居るアールベルグ・スキー術のために見向きもされぬ反アールベルグ派の人々の中に私の理論と同様なものが發見される。フアックの説と比較するに都合

のよい様に又實地にあたつて研究しよい様にシエーレンクリスチャニヤの方法について此等の人々の意見を次に列擧しよう。

一九一二年 C. T. Luther: "Schule des Schneelaufs"

["Der gezogene Querschwingung 或は der gesteuerte Querschwingung に於ては弧の内側スキーが先になつて滑る。弧の内側スキーは外側に角づけをして、踵に体重をかける。さうする間に弧の外側スキーは全く拔重され、たゞ僅かに後端で外方に向つて壓すのみで、平にしたまゝ、弧の内側スキーについて廻り、運動の終りに近づいて再び体重がのせられる"]

一九二五年 Dr. Hokeney: "Alpine Skilauftechnik"

「体を右方(斜面の方)に傾け、多少後方に傾く。それと同時に踵を壓して、スキーの後端を斜面の下方に押しつける。……趾をバツケンに通してある趾皮にひつかける様にし、丁度……スキーの前半を持ち上げ様とするかの如くにする。」

一九二五年 H. Hoek: "Der Schritt" 第八版

「全体重を殆んど右足(即ち内側に突き出したスキー)の踵に置く。……スキーの後端の廻轉を壓することによつて

成し遂げる。それと同時に趾先を軽く持ち上げる。(そうやつて多少スキーの先端を持ち上げる!!)」

アールベルグのバイブルの世に表れて以來のスキー書をも檢べて見ると次の如きがある。

一九一八年 Winkler: "Der Skilauf"

Der Bezogene Kristiania に就て次の如く云つて居る。(著者は Der Bezogene Kristiania と Der Sohlenkristiania とを同じと考へた)「兩方のスキーは多少強く踵に体重をのせらる。」更に缺形姿勢を實現する方法に就ては次の如く言ふ。「弧の内方のスキーでは踵を壓することが非常に強められるのでスキーの前部が完全に拔重し、趾先が上に引き上げられることを感ずる様になる。踵に体重をのせてスキー後端に荷重する間に趾先を引き上げる力がスキーの前端を雪面から引き上げる。」

一九二九年 Uhlig: "Erziehung zum Skilaufen."

「シエーレンボーゲンが、急に腰を動かすことと、力強く体をねぢりまはして下に強く壓しつける様にする、及び強く踵に体重をのせることが同時に行はれると、急に小さく廻るシュウングが生ずる。之をシエーレンクリスチ

ヤニヤとも云ひ、Gesteuerter oder gezogener Kristiania とも云ふ。」

一九三〇年 Dahinden, "Die Ski-Schwünge und ihre Gymnastik."

「他の多くの教科書に推奨せられる如き極端な前傾、即ち樂に廻轉するためにスキー後端を拔重しなければならぬ様な前傾は全々排すべきである。急激なシユウングでは何時も顔面制動をやるだらう。それと反對にスキーの先端の拔重に就て出来るだけ注意されねばならぬ。何故なら凡てのシユウングに於てスキーはスキー後端で廻るからである。(スキーは、ビンディングから前の部分が長いからそうなる。)」

一九三一年 Winkler, "Die Laufschiule"

「其の際内側スキーを前に出しスキーの先端を軽く廻轉に對し内方に傾けて体重を後方にのせる。」

私の最も心外であり、且つ最も愉快であることはアールベルグ派の總師ハンネス・シユナイダーがフアンクの説とは反對に、私共の理論に合致する様にシユウングをして居ることである。バイブルの活動寫眞を精密に御調べになれ

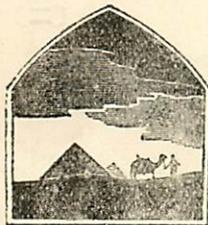
ば諸兄には幾多のよきスタイルが見出されるであらう。

(スキーの驚異第二版にて次の寫眞参照)

列の番号	真の順位	列中の寫
48 ;	5, 6,	3, 4,
73 ;	1, 2,	3, 4,
76 ;	3, 4,	2, 3,
77 ;	2, 3,	3, 4, 5,
83 ;	3, 4,	3, 4, 5,
84 ;	3, 4,	5, 6,
104 ;	5,	6,

これまで一例としてシエーレンクリスチャニヤについて述べ來つたのであるが、他のシユウングについても同様の疑問を生ずる。廻轉ははたして體重を爪先に移して行はる可きであらうか。諸兄のこの點に就てなされた御研究の發表をまつて、更に他の理論上の疑問の點について研究を重ねたい次第である。

一九三一・五・三一



## デスタンスレースの練習法に就て〔二〕

高

橋

昂

### 練習の時日

いづれの競技に於ても最少限一ヶ月のスキーをつけての練習を必要とされて居ます。

スキー王、ハウグ選手は一旦三〇基米―五〇基米の大長距離競走を走らうとしたならば、最初非常な努力で始めねばならない。殊に五〇基米について自分は長距離競技即ち十五基米―二〇基米の競走に對して充分練習が出来てゐるものとしても、尙競走の四、五週間前に競技練習を始めると言ふて居る位でありまして、練習時間の豊富な北歐の大選手にして既にかくの如くであります。

然るに昨年のように早くから多量の雪に恵まれた年は別として、降雪の比較的遅い北海道に於て、スキーを履いて行

ふ練習を豊富にするためには、餘程巧みに降雪を利用せねばならないのであります。

我々がイタリー・コルチナの万国學生大會に出場したとき、北歐選手が六〇日のトレーニングを踏んだと稱するのに對して僅々二週日と云ふ哀れさで如何に不利であつたかと云ふことは、それだけでも御諒解になることと思ひます。その結果に於て四等、五等を得た位でありまして、六〇日とまで行かなくても、せめて一月の時を持ち得たならばより以上の成績を得たであらうと思はれるのであります。次に北歐の大家アムンゼン氏の練習表を参考のため掲げます。

#### 練習期間四週間の場合

第一週 八基米―一〇基米 二回

樂なコースを適當な速度で走る。

第二週 一〇基米—一五基米 二回

少し困難なコースを適當な速度で走る。

第三週 一五基米—一八基米 三回

少し困難なコースを速く走る。

第四週 十八基米—二二基米。

前週通り。

#### 練習期間六週間の場合

第一週 五基米—一〇基米 二回

樂なコースを適當の速度で走る。

第二週 八基米—一〇基米 二回

前週通り。

第三週 一〇基米—一五基米 二回乃至三回

少し困難なコースを速く走る。

第四週 一三基米—一七基米 三回

前週通り一度は全速力で走る。

第五週 一五基米—二〇基米 三回

前週通り。

第六週 一七基米—二二基米 二回

困難なコースを可成速く走る、一度は全速力で走る。

これを見ると、ノールウェー選手は我國選手から比較して意外と思ふ位しか練習をしてゐない様であります。彼等が競技目的は複合競技の優勝者となることであつて、皇

帝カップの懸けられてゐるこのレースこそ、北歐三百万の國民のひとしく望む處であります。

練習距離の大小と云ふことは人々によつて、其の内容を異にしてゐることは申すまでもないこととあります。例へばノールウェーのナンバーワン、グロツトムスブリエーテ氏は、ホルメンコーレン競技の前日に、一人の友を連れて、北歐の早朝を練習から歸つて來たのを見ましても、一週一日乃至三日の休息日と云ふことは、強い練習をせぬ日を意味して居るのであります。

このアムンゼン氏の練習表に對して、中歐の名選手シユナイダー氏は六〇日長距離練習表を著して居ますが、其の内容の大要を申し上げれば、十八日の休日と、二四日のクロスカントリーと、八日の登山と、十日のスウキングを用ひて居ますが、之を見ても如何に滑降技術を重要視してゐるか窺れるのであります。

よく世間では登山と云ふことと、競技と云ふこととが没交渉の様に考へられて居ますが、登山はスキー技術の進歩膽力、判断力の養成には缺くことの出来ないものになつて居ります。

殊に今日ではレースコースの發表が競技當日と云ふことになつて、殆んど未知のコースを走る様になつてゐますので、一層登山によつて養成された迅速なる判断と、實際化した各種の技術を必要とされて來てゐます。

サンモリツ市に於てのオムリビツク五〇キロ米競走の前々日に、ノールウエーの選手連はリュツクサツクを背にして山へ遊びに行つたのを知つてゐます。

又世界最大のスキー競技會と稱せらるゝホルメンコーレンの五〇キロ米競技に於て、大長距離の覇權を奪ひ去つたフライランド選手ラツバライネンの一行も亦リュクサツクを肩にして遠い山へ一日の清遊をして來たのを知つて居る。

全く競技真近くなると多くの選手は本人は知らんが、軽い神過衰弱にかゝつて居るのであります。例へばおこりほかつたり、いら／＼してゐるのはその現れであります。この氣分を晴れ／＼とした、山の精氣に觸れて、技術ばかりでなく英氣を養ふだけでも、登山は意義あることと思ひます。

猶、シユナイダー氏は五〇キロ米競技出場と云ふことは大變困難な仕事であつて、少くとも五ヶ年の練習期を必要

とすると思ふて居ります。それには最初の練習に一五—一七キロ米、第二年目には二五キロ米—三〇キロ米、第三年目には三〇キロ米—三五キロ米、第四年目には三〇キロ米—四五キロ米と云ふ様に、次第に其の力を高めて行くべきものと説いてゐます。

又、ハウグ氏は五〇キロ競技を始め様と思ふ人は、先づそれに先だつて、少くとも二年間長距離競技を行ひ、後に三〇キロ米を走り、その後には達しなければいけない。

而してその長距離も五〇キロ米競技の様に、長く合理的のトレーニングをしなければ、よい結果の完成は遅いと稱せられてゐる。北歐中歐の兩大家にして既にこの五〇キロ米大長距離競技の困難を稱えてゐるのに對して、この難事業に對して合理的練習を行ひつゝある選手の少きは勿論のこと、未だ發育の途にある少年にしてこの大長距離に出場し入賞した例もありますが、その少年の前途を思ふならば當事者は嚴重に少年の出場を禁すべきであると思ひます。

次に參考としてシユナイダー氏の五〇キロ米、三ヶ月練習表を申し上げます。

第一週の練習日 月、水、金 毎回 一時間

第二週の練習日	月、水、金	毎回	一時二〇分
第三週	〃	〃	一時四〇分
第四週	〃	〃	二時間
第五週	〃	〃	二時三〇分
第六週	〃	〃	三時間
第七週	〃	〃	三時三〇分
第八週	〃	〃	四時間
第九週	練習二日	〃	四時間二〇分
第十週	〃	〃	〃
第十一週	〃	〃	五時間
第十二週	〃	〃	五時間二〇分

この練習表によりますと、毎日の練習量が北歐のアムゼン氏の方法に比して著るしく多く、又休も多くなつてゐますが、私は一般的なアムゼン氏の方法が適する様に思ひます。

### 競技練習と日常生活

確實にトレーニングを始め様とする人は充分に、自分の状態に注意しなければ非常に早く疲労してしまひます。それではどうして最良のコンデションを得るか云ふ間に對して、ハウグ選手は只私は極端に規則的に生活して健康を

得る、そうすることによつて必然的にエネルギーが出来て来る。そのエネルギーが良いコンデションに於て實際的に役に立つと云つてゐる。

又ノールウエでは次の様な注意書がのせられてゐます。  
第1. 窓をあげ放しにして充分なる睡眠をとれ。

〔註〕これは、西洋建築に於て必要なことであつて、我々日本家屋に於てはこの必要なし。

第2. 毎朝食事前十五分の体操を行へ。

第3. 練習後は全身を洗ひ摩擦すべし。長時の入浴は有害である。屢々下衣を取り換へよ。

〔註〕入浴は有害であるとして多くの人は入浴をしないが私は余り度を失した入浴でないならば毎日の入浴によつて爽快な気分を持って翌日に備へると云ふことは、ごく必要なことであり、そのために筋力を弱くするなどと云ふことは、一度も経験したことはありません。又競技の日でありましては一競技を終るとすぐ入浴して、よく筋肉をもみ翌日の競技に備へると云ふ習慣を今まで持續して来て居ます。又世界の長距離界を風靡せしフィンランド選手、フィンランド特有の蒸風呂を知るときに、私は風呂に就いて優れた何物かを考へさせられるのであります。

第4. 食事を適當に攝り消化し易き物をとれ。

〔註〕 北歐選手の食事は全くよく咀嚼してゐて、我々から見ても不思議な位、空腹感をうつたへない又ノールウェーの食事時間が朝食八時、晝食午後四時、夕食午後九時と云ふのは五〇キロレースの時間と非常に面白い關係を持つてゐる様に思ひます。いづれにしても五〇キロレースの途中に於ける空腹位つらいものはないのでありますから、選手諸君は規律正しく習慣づける必要が充分あると思ひます。又よく選手の食物に就いて制限を加へる方々がある様ですが、陸上競技ならいざ知らず、スキー選手と食物の關係と云ふことは、問題とする程のものでなく、馴れぬ食物を取らぬこと、天ぷらと云ふ様な植物性の脂肪物だけをつゝしめば、他は選手の好むところのままかせて差支へなく、何れかと云へば肉食よりは菜食がよいとされてゐます。

第5. 生活様式を變へるな。若しその必要あるときは緩かにせよ。

第6. 酒、煙草、コーヒーを避けよ。

〔註〕 酒、煙草は今更申述べる要はありませんが、コーヒーの害の大なるに氣付かない人が多い様ですが、コーヒーは以上の二つにも劣らぬ大害をなすものであると稱せられ、一九二五年のケンブリッヂ大學のホートの選手は、三ヶ月の合宿生活に於て一滴のコーヒーも攝らなかつたと報告されてゐます。

第7. 防寒に注意せよ。

〔註〕 病は未然に防ぐより方法がない。では輕風邪のときはどうすればよいかと云ふと、アスヒリンは胃腸と關節をいためるのでありますから、實母散とか中將湯と云ふ様な身体を温めるものを推選致します。

最後に本道選手は、本州選手に比して各種の點に於て非常に有利の地位にありながら、何故例年慘敗を重ねるかと云ふことであります。實際我々がいづれの年に於ても選手の口から聞せらるゝところのものは、雪質がとても悪かつた、又或る者はコースがとても悪かつたの二理由に盡されてゐる様であります。私は此の説に對して全く同意致し兼ねるのであります。

高田にしろ、飯山にしろ、大鰐にしろ、樺太にしろ、各れの地點も北海道に比して雪質は悪いのであります。では本州の雪はなぜ悪いかと云へば皆さんはもう直ぐ頭に、温かいからとお考へになるでありません。

樺太は之に反して、あまり寒いので又いけないのであります。寒過ぎていけないと云ふことは如何にも不思議な様であります。北海道の風の強い山に登つた人がよく知つて居らるゝ高山のウキンドクラスト(ウキンドクラストと

云ふのは風に吹きかためられた柵屋根の様なしまをなした雪が樺太の雪なのであります。零下二〇度附近のウキンドクラストは、全くお話しにならない悪質なのであります。如何に巧みに塗られたパラフィン製のスキーを以てしても海豹皮をつけたスキーと同じ様に、二五、六度もあらうところの斜面でも、平氣で登らせる様な不思議な雪であります。とにかく日本の良雪質の中心は本道でありながら、雪質に於て敗北すると云ふことは、本道選手の雪質に對する不注意、淺學を雄辯に物語つてゐるのであると思ひます。雪質に關する不注意とは何かと申しますと、或る寒い朝、カラ／＼とした雪の日には、山と云ふ山は人によつて足跡が残されない處はなくなつて、黒い人の群れは、鳥の群の様に札幌の西方の山に亘つてゐるのを見られるでせう。

— その中に、日が照つて來て、握れば雪球が出来る様になると、スキーが動かなくなる、轉べばお尻が濡れる、スキーを太陽に直面さして乾して蠟を塗つてもほんの一瞬にして、又もと／＼のになつてしまふ様になると、もうスキー場からは一人歸り二人減りして、午後の二時頃には午前迄あれ程の人影も何れかへ影をひそめてしまひます。

このやうな雪に對して、本州選手は今一步を進めてこの悪雪に對して、如何にすれば面白い滑走を續行し得るかと云ふことを研究し、又その悪雪に對するテクニクの研究をおこたらないのに對して、今日は雪が悪いから山へ行くのはやめたと云ふ聲は一般人は申すまでもなく、本道代表選手からしば／＼聞せられる言葉であります。進むと退くとの間には非常に多い差を見出します。

實際レース當日に必ず良雪になると限りません。本道であつても本州の雪に劣る様な中でレースをやつてゐることがしば／＼あるのであります。こんなときに、常々悪雪を手にかけて人は自信を以てワックスを塗つてゐますに反して、良雪のみを選んだ人の驚いたときはもう勝敗が選手の出發前に於て決せられるのであります。

雪と云ふものは例へて見れば、太陽光線のスペクトルが赤、橙、黄、青、紫と云ふ様なもので、例へば赤色が高田橙が大鰐、黄色が札幌、青や紫が樺太の雪とすれば、黄の雪には強いが橙や赤に弱いと云ふことは、その選手の赤や橙と云ふ雪に對する研究の不備、即ちその雪質に對する技術「ここで云ふ技術と云ふことは Waxing を初め各種の技

量を云ふのであります」の未熟と云ふことであります。一般的の言葉で云へば、應用のきかない選手と云ふことであります。

次に本道選手の滑降技術は本州、特に信越地方出身選手に比して著るしく劣つてゐるのでありますが、こゝに至つた原因は、環境が然らしめたこと以外に競技司會者の指導を誤つてゐたことも否めないことであります。本道選手權大會のコースは全く禿山にとられてゐる上に、極めて直線的で殆んどターン（方向變換）を必要としないと云ふてもよい位平凡なコースであります。例へば本道コースの形が四角形であるとすれば、他地方のコースは八角形、或は十角形でありまして、各角に於ての轉倒といふことが極めて重大性を帯びてゐるのに對して、本道のコースの轉倒はレースの勝負を左右する程の重要性を帯びてないのであります。實際本道選手は、禿山以外はあまり好んで滑らない様であります。森林滑走に慣れると云ふことは、スキー術として最も必要なことであつて、森林滑降の下手と云ふことは、ちようど上野廣小路の雜沓を、田舎者がビク／＼して歩けないといふことと同じであつて、これが高田、大鰐

豊原に於ての本道選手の芳しからぬ原因であるかと思ひます。

終りに臨んでノールウエーの權威者、ヘルセット中尉が昨年全日本學生大會の席上に於て話しされた教訓を紹介致します。

大選手たらんとするには、一つの大なる大會に出場するよりも、地方的の小さな競技會に、數多く、出場して多くの場を踏むと云ふことが必要であります。なぜならば、その多くの競技は、一つの大なる大會よりも多くのレースに於てのコツを諸君に教へるであらうと云ふのであります。



# 全日本選手権大會に臨みて (四)

時 日 二月十七日午後六時

場 所 札幌商工會議所會議室

出席者

箕輪正治、秋野武夫、木間四郎、小野寺將、村井延雄、關口勇、長田光男、葛西儀四郎、高橋次郎(小樽高商教授)、南留三郎(札幌商業教諭)、錦戸善三郎(札幌第一中學教諭)、高野重一(北海道廳)、宮下利三(北海道廳)

大野教授、板内教授、廣田戸七郎、高橋昂、長野寛

小野寺 シャンツエの蔭に上つてからのあすこのカーブは凄かつた。

錦 戸 兎に角大鰐にでもさうであつた。結局北海道の選手にはあのコースは少し恐ろしく見えて飛ばせなかつたといふ點でなかつたか。

廣 田 併し北海道の選手としては状態が良過ぎると思ふ。

高 野 その意味をモウ少し詳しく。

廣 田 然しあれを眞似て酷いコースを探るといふやうなコンデイションの悪いのを眞似る必要はないと思ふ。

高 野 併し競技を奨励する目的からすると相當難コースを探ることも必要と思ふ。

從來北海道だけでやるのであればよいが、世界のオリムピックを——眞似てやるとなると。

高橋次郎 私は不賛成だ。レースに適した合理的な地形のコースを選定したいと思ふ。

その地方で一番採り得る總てのコースをとればよい。無理に苦しくした地形のコースを作る必要はないと思ふ。それでその地方のスキーが發達しなければしようがないことだ。

高橋昂 僕はレースの奨励といふことを考へてゐるが、コースの採り方に就いて私は慙ふ思つてゐる。

全日本スキー選手権大會は二月初にやることは根本から間違つてゐる。五十キロをやるためには少くとも正規の練習は七週間要るのであるから各選手の状態が最も良好である時に於て開催されるならば、其の名にふさわしいことになる。それ故私はシーズンの終りに於て全日本スキー選手権大會を切望する。其の次に競技コースの難易といふことは其の年の練習度合が多かつたか少なかつたかと云ふことによつて決せらるべきことであつて、雪が早く来て練習の充分に出来た年には、難かしいコースを採用し雪の少なかつたり、遅く来た様な年には比較的樂なコースを探ることが必要である。其の意味で競技會を始めるのにシーズンの始めには小さい競技會から初めて次第に大きな競技會に進んで行くことはスキー界の爲め考へらるべきことであつて始めから難かしいコースの獎勵をやることは不賛成だ。競技會は巧い人ばかり集つてゐるならいざ知らず、競技者の質によつてコースを考へなければならぬ。

幼年の場合と青年の場合も同じことであつて、例へば十七歳以下の体力と、十七歳以上二十、二十五、二十七歳といふやうな血氣盛んなものと同じ處を走らせることは非常

に無理と思ふ。

醫學的方面から小田博士の話でも十七歳以下は走らしてはいけないと言はれてゐる。

此の問題は日本では全く考へてゐないらしいことであつて、殊に樺太の今回の様な危険と困難をともなつた様な時は幼年の場合はモット判然したコースとして貰ひたいといふことを一寸御参考迄に申上げて置きます。

廣 田 然し難しいコースといふものはよいと思ふ。不自然でなければ。

南 例へばあの林のなかを通過するやうな。

高橋昂 六ヶ敷しいといふのは要するにテクニクを要するといふことでせう。

高野 勝つためくといふのなら六ヶ敷しいコースもよいでせう。

南 要するに自然のコースで六ヶ敷しい危険なコースでなければよいのです。

高橋次郎 無茶なコースを探るもんだからいけないのだ

廣 田 樺太のデイスタンスは先づ此の位にしてジャムブ競技に移らう。

今度のジャムプの日は實際無理であつた。

よい選手が大分負傷した。まア骨を折つたり死んだりした選手のなかつたのが不幸中の幸であつた。

宮 下 日本のよい選手を傷付けるのは一大損失だよ、何せ無我夢中なんだからね。

高橋次郎 高橋さんのお話のやうに各クラスの別をつけるのは當然のことです。

たゞ少年組が成年組より巧い。

高橋昂 ジャムプでは少年も成年も同じでよいと思ふ。

高橋次郎 併してそれは技倆なんかで差をつければよい

秋 野 採點の方面としてはどうです。

廣 田 級別にした方がよいと思ふ。

宮 下 デイスタンス程大問題でないと思ふ。

秋 野 成年と少年とで採點の方法が違ひましたか。

廣 田 少年組も成年組も全体としては非常にレベルが上つて来たと思ふ。巧い。

秋 野 ジャムプ全体を通じて巧い人を見て點をつけてゐるのですか。

廣 田 私はさうです。統一して見てつける。

だから一遍飛ばして見てそれで後から直るのがありますつまり規準になる點をつけて之と對照してレベルをさけて行く譯です。

スキ一のジャムプはたつた一箇所で審判官が見てゐるんだから或は他所の方に見てゐる人に審判の最高のものが高に見えぬことがあるかも知れない。

宮 下 之は餘談ですが、あゝいふものをカンプリヒタ一の點數を見るのは一箇所で見るのはよく見えるかね。

廣 田 それは自分の眼で見てる範圍です。

宮 下 全体的にもう少し部分的に見る必要はないか。

フライト、アプローチ、サツツ、ランディングと夫々審判を分けてやつたらどうか。

廣 田 それは非常に面白い審判が出来ると思ふ。

高橋次郎 併しジャムプは全体的のものだからな。

宮 下 それは専門家の意見を聞かなければ判らないが私はさうした方がテクニクを見る上に於てよいと思ふ。

南 轉ぶ原因を見ることは下に於てわかりますか。横で見ると割合に見難いランディングがよく見える。

縦斷、横斷はさういふ處に立つてゐる方がよく見えると

思ふ。

秋野 ジャンプは部分的に採點することはよくないと思ふ。ジャンプは初めから連続的に見える處で採點した方がよい。

廣田 勿論現在ほさう云ふ意味で審判が作られてある譯でせうね。

宮下 將來スキージャンプが発達するとフォームといふものは眞に問題にならぬかな。

廣田 フォームと距離とでどつちの方が行き詰りが早く来るだらうか。ホルメンコルンの毎年のレコードではフォームの方が先にまるつてしまふやうだが、然しそいつは未だ判らぬ。

高橋昂 三遍なら三遍飛んでいつでも立つといふ場合を考へてフォームと飛距離のことを考へるとフォームの採點が要らなくなるんぢやないかね。

廣田 さうなるとジャンプの解釋といふか特に飛ぶといふのではなくて如何に綺麗に飛ぶかといふ方が距離で行くよりも必要なことだと思ふ。

それでどつちへ行詰りが来るか今一寸判らない。

高橋次郎 併し距離とフォームといふものは離すべからざるものと思ふ。

宮下 スキージャンプは一の技術として扱ひ競技ぢやないね。

廣田 競技には違ひないが、一種の技術と見てよいと思ふ。成るべく五十米前後を基準とした臺といふことで、距離の方の制限は既に出て来る。

宮下 さうするとスキージャンピングといふものは結局點數で行かなければならぬのだな。

高橋昂 例を引くとスケートのフィユギアとそれに陸上競技のブロードジャンプを交ぜたやうなものだ。

栃内 唯だ距離の出る方が興味があるね。

廣田 素人の考へではどうしても距離の方へ行くが、それで十人が十人飛んで五十米突を同じく飛んだとするとフォームで差をつけるより仕方がない。

高橋昂 さういふ時代は何時来るかね。スキーの聖地のホルメンコレンでさへ觀衆は距離に興味を多分に持つて居る様です。

秋野 ジャンプの成績を發表するのに何點と定めて素

人でも一寸計算に間違いのない様な採點はないものでせう  
かさういつた處でフォームといふやうな採點の合計點を書  
き表はして發表することは困難ですか。

廣 田 あれは新聞記者が書くんです。

競技に出た人がそのまゝの記憶を何かの機關で發表すれ  
ばよいがね。

高橋昂 運動記事の中にスキーの一方が上だとか下だと  
か二回目に寢込んだとかあるが、さういふことは進歩の上  
に於てよいと思ふ。

廣 田 だから僕は全日本の記事に眼をつける人は欠點  
を出来る丈書いた方がよいと思ふ。

某 測尺係の役もつらいものだ。

高橋昂 この間の北海タイムス社の大會の斜面掛は悪か  
つたな。

錦 戸 嫌なもんだな。

高橋次郎 實際眞面目に競技を見て呉れる人があるとい  
いが、チャチャを入れる人があつても役目(係)をやつて  
くれる人がない。ジャムブの練習にチャ／＼を入れられた  
ら遣る氣持はない。

測尺をやるとどつかで實際聞くに堪えないやうなことを  
云ふ。

高 野 樺太は正確であつたか、實際疑問だつたな。

廣 田 然し高野君あれは見る所によつて違ふ。僕等の  
位置から言つて三十米突行つたと見ても斜から見ると違ふ  
やうなもんだ。

高橋昂 位置が違ふからね。

栃 内 六ヶ敷いでせうね。



# 雜 錄

## 編輯後記

### ◆第二回山の談話會

十月二十三日夜六時半から札幌商工會議所會議室に於て開催。

根本測候所長の「北海道地方に於ける雪の分布に就て」の講話は都合により次回に延期し、田中哲中佐の「札幌附近の五萬分の一の地圖に就て」と題する講話を聴き十時散會す。出席者は

田中哲、大野精七、井田清、徳永正雄、相川修、佐々保雄、高橋昂、大戸健一、四平井綱彦、羽島金三郎、長野寛、柏木民次郎、塚田豊治、神谷俊雄、小黒春之助、木下彌三吉

### ◆講入圖書並に寄贈圖書雜誌

- 山 幸 第七・八號 阪神山岳會
- ベデスツリアン 自第三百三十二號 神戸山岳會
- アルカウ趣味 100. X. M. No. 9. No. 11 日本アルカウ會
- 山と谿谷 第九及び拾號 山と谿谷社
- 會 報 9 日本山岳會
- 山と旅 百五號 ジャパンキャンピングクラブ
- 廣崎秀雄 兩君の遭難一週忌に際して 筑紫山岳會
- 渡邊邦彦 旅 第一、二、三號 山旅クラブ

發行が遅れて申譯ありません。深くお詫び致します。

札幌は雪がすくなくて、インターカレラのスキー競技會もどうかと危まれておりましたが、當日になると案じたほどのこともなく終了しました。距離競技もジャムプもこの前の會場とは全然別な處で催されました。特にジャムプは今度新しく出来た大倉シャンツエで花々しく、ほんとに花々しく行はれ、四十メートル以上を飛んだ選手が十七人もありました。全日本の豫選、御來道記念大會、中等學校大會には五十メートル以上のレコードが續出するこゝと思ひます。

市街地附近は雪はすくないですが山の方は、豊富です。ことに天氣が續くので、この頃の山行きは全く恵まれてゐるやうです。

### 訂 正

I 前號坂本直行氏のカットの目次が「天狗澤入口附近より見たる天狗山」とありましたが、あれは「白井川より見たる天狗岳」の誤りでした。

II 同じく栃内吉彦氏の寫眞「大聖寺上より見たる西行内岳」とあつたのは「大聖寺より見たる西河内岳」の誤りです。以上何れも編輯者の粗忽でありました。訂正致します。

◆「スキー」を研究せられる人、登山に興味を  
持たれる方が一人でも多くお読み下さること  
をお願いいたします。

◆「山岳」と「スキー」に関する御寄稿と寫眞の  
御惠送をお願いします。

原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一  
字下けること。

定 價 金 參 拾 錢

\* 前金御申込か、現金でなければお送りいた  
しません。

\* 御送金はなるべく振替にてお願い致します。

\* 六册分前金拂込の方には送料を頂きません

\* 前金の切れた時の御知らせは最後の分の包  
装に同封します。

\* 次の御送金あるまで配本を見合せます。

昭和七年一月二十五日印刷  
昭和七年一月二十九日發行 (毎月一回發行)

編輯者 長 野 寛

印刷兼 發行 者 長 野 寛

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西十三丁目

發行所 山と雪の會

振替口座水櫃八四九五番

昭和七年一月二十五日

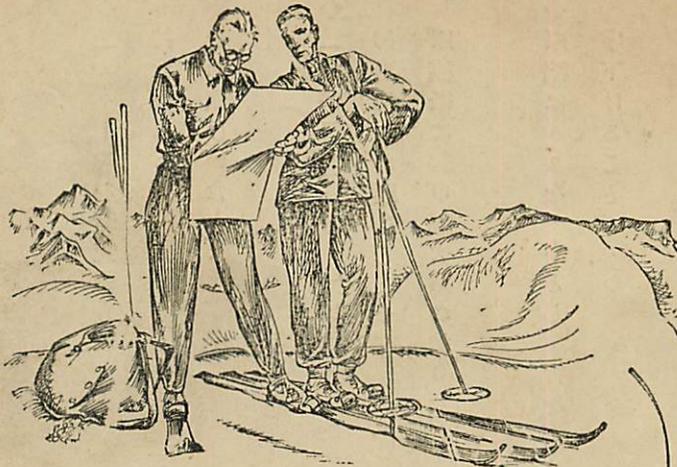
印刷納本發行

山と雪

第二卷

第二號

定價金三十錢



アールベルグ・スキー及び冬山の道具！

(純正ヒッコリー材・ロックバーチ材メープル材)

ビッケル、EDELWEISS印

(鋼鐵手打製 24.27 $\frac{1}{2}$ ・30.33 $\frac{1}{2}$ cm 保証付)

ルックサック (スイス製布地、絶對防水)

スティガセン (鋼鐵手打製八木瓜其他)

燃料META及びアルミ炊事具各種

羽毛製シュラフザック及び冬期露營用具

Arlberg-Ski



Hannes Schneider

(商標登録)

三越・伊東屋・白木・野澤屋

合名會社

美満津商店

東京・本郷・赤門前